

ソヴェト国家形成過程における青年組織の考察：コムソモールの位置・役割をめぐる論争を中心に

松井, 康浩
九州大学法学部助手

<https://doi.org/10.15017/1903>

出版情報：法政研究. 56 (1), pp.56-106, 1989-09-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

ソヴェト国家形成過程における青年組織の考察

——コムソモールの位置・役割をめぐる論争を中心に——

松井康浩

はじめに

一 コムソモール前史

——一九一七年革命における青年組織——

二 コムソモールの設立

(一) 一〇月革命後の危機と青年組織

(二) 第一回全ロシア労働者・農民青年同盟大会

三 コムソモールをめぐる政治過程

(一) 党・コムソモール関係の模索

(二) コムソモール内部の論戦

(三) 中央委批判の高揚と党中央委の介入

四 ソヴェト国家下のコムソモールの位置・役割の確定

おわりに

はじめに

説 論

近年、ロシア革命研究は、いわゆるボリシエヴィキ中心史観から離れて、多様化の度合いを一層深めてきた。労働

者・農民・諸民族あるいは女性や青年といった諸社会層を担い手とする社会運動などが広く検討対象にされ、多様なロシア革命像が提示されてきたといえる。⁽¹⁾しかし、一方で、ポリシェヴィキを中核とした革命後の秩序形成の問題も無視されえない。広く社会の動きが視野に収められつつも、同時に、ロシア革命から登場する新しい国家——「プロレタリアート独裁」とか「共産党独裁」とか言われるもの——の形成の問題にもまた、多くの関心が寄せられなければならない。

ロシア革命直後の国家形成の問題に着目して一連の論考を発表している石井規衛氏は、これが重要な研究テーマである理由として、「①革命なる事件の決算と、②後の全体構造のいわば鑄型の形成、という二つの面を合せ持つ革命直後の国家形成には、両者が孕む様々な問題が集約的に内包される⁽²⁾」との観点を示した。氏は、革命の中から新しく登場する国家を「党」『国家』体制と呼び、その概念枠組みに依拠してロシアソヴェト史を貫く長期的パースペクティブで歴史を捉える興味深い視座を提供している。この問題提起を評価した和田春樹氏も、「あらゆる革命が二つの局面からなっている。第一の局面は、古い国家体制の転覆、抑圧された人々、とくに民衆の立ち上がり、自己解放の局面である。これは祝祭の局面だといえるだろう。第二の局面は、新しい国家権力の創出の局面である。革命的民衆の相当部分の組織的統合の局面である⁽³⁾」と述べ、国家権力の創出＝国家形成の問題に関心を寄せるとともに、革命時に立ち上がった民衆の統合という観点を、国家形成の議論と結びつけた⁽⁴⁾。

筆者は、国家形成＝革命的民衆の統合の意味を、物理的強制力による支配を含みつつも、革命時の民衆の要求を一部組み入れつつ遂行されることと把握したうえで、和田氏、そして石井氏の議論を、「ロシア革命からソヴェト国家へ」という歴史のダイナミズムをどう描くかという問題提起と受けとめたい。

このように課題の大枠を設定した場合、ロシア革命後に設立されたソヴェト青年組織コムソモール（Российский Коммунистический Союз Молодежи＝Комсомол）ロシア青年共産主義同盟）は、興味深い対象として浮かび上がって

る。というのは、コムソモールは、二月革命以後に発生し一〇月革命に積極的に参加した各地の青年組織にその組織的起源を有していること、しかも、コムソモールは、紆余曲折のすえ、大衆団体として青年層を統合・動員する機能を付与され、ソヴェト国家⁽⁵⁾の一翼を担うものとして自己を定立したからである。さらに、コムソモールは、革命時の青年層の要求をある面では切り捨てる形で成立したにもかかわらず、青年の要求の一部を実現した側面もあり、革命の獲得物を保証したことが、ソヴェト国家の一翼を担いうる一つの重要な条件となったものとも思われる。その意味で、青年組織のコムソモールへの再編のプロセスは、先に設定したロシア革命からソヴェト国家へという歴史のダイナミズムの一面をまさに体现しているといえよう。

このように、創設期コムソモールの検討の対象に設定することが一定の意義をもちうるとしても、議論をより明確にするために、検討対象をコムソモール一般ではなく、さらに限定する必要がある。国家形成との関連から言えば、コムソモールの位置・役割をめぐる展開された対立・論争が恰好の素材となる。第一回全ロシア労働者・農民青年同盟大会（一九一八年一〇月二九日～十一月四日）でのコムソモールの設立以降、コムソモールはそもそも必要なのか、もし必要だとして、それが社会主義をめざす運動においていかなる役割を果たすのか、あるいは革命後の秩序の中でいかなる位置を占めるのか、といった問題について、共産党の中央、地方・下部活動家やコムソモール指導部、活動家など各政治主体の間で対立が生じ、論争が繰り広げられた。この論争のなかでは、コムソモールの主要基盤である青年労働者の利益擁護を実現する方策にまつわる対立を背景にして、コムソモールが共産党といかなる組織関係にたつか、国家機関や労働組合とはどうか等、コムソモールの側からみた革命後の国家秩序の問題が焦点となった。それ故、コムソモールの創設から、論争が一定の決着をみてコムソモールの組織的地位が確定される第三回コムソモール大会（一九二〇年一〇月）にいたる時期のコムソモールの政治過程を検討することは、国家形成の問題について新たな像を提供することを可能にするであろう。

このような視角から、従来のコムソモール研究についての若干の整理を試みたい。まずソ連では、コムソモールがソヴェト「政治システム」の一環を構成し、その存在理由を不断に再生産する作業として、コムソモールに関する研究は大量に存在する⁽⁶⁾。なかでも注目すべき著作は、一〇月革命後のコムソモールと党の相互関係を中心に分析したトゥルシチェンコの『党とコムソモール 一九一八〜二〇年』である⁽⁷⁾。この作品は、他国の研究者には接近しえないアルヒーフや同時代のコムソモール機関誌に依拠して著されており、事実関係など教えられるところは少なくない。加えてトゥルシチェンコの場合、国家論的視角から「プロレタリアート独裁システム」を構成するコムソモールと党の関係確立過程が究明され、本稿の視角とも重なる部分がある。しかし、トゥルシチェンコの分析は、ボリシェヴィキ党やレーニン(B. M. Ленин)の側に事前に明確な青年組織論があつて、それが党の正しい政治指導——「レーニン主義的党指導の原理」によつて実現されていったことを論証することに主眼がある。そのため、コムソモールの組織的地位確立過程の複雑性が単純化され、様々な政治主体の営みが十分評価されていないきらいがある。そのことと関連して、彼の著作には、党の指導者(例えばレーニンやクループスカヤ[Н.К. Крупская])は重要な登場人物として描かれるが、コムソモールの若き指導者は主体的存在としては位置づけられず、コムソモール内部の反対派は、「正しい党の路線」からの「偏向」として切り捨てられがちである⁽⁸⁾。

一方、欧米では、三〇年前にでたフィッシャーの著作が、コムソモールの大会議事録を丹念に読んだ先駆的研究としてあげられる⁽⁹⁾。当初、相対的に自立性を有していたコムソモールが、党の統制下に置かれていく様子がバランス良く描かれ、大筋で妥当な評価がなされている。しかし、資料的限界は否めず、概説書の域をそれほど出てはいない。

つい最近、フィッシャーの研究水準を越えた本格的な作品が、ティラドにより著された⁽¹⁰⁾。これは、コムソモール中央委やコムソモール・ペトログラード委員会の機関誌を利用した当該期のコムソモール、とりわけペトログラード・コムソモールの包括的研究である。一七年革命期の青年運動や内戦期のコムソモールの実態的活動にも言及し、さら

に、コムソモール反対派の分析は学ぶところが多い。難点をいえば、論調が反対派にやや傾斜しがちなため、他の政治主体、とりわけコムソモール指導部の位置づけがやや不明確になっていることである。この点については、本論で明らかにしていきたい。

こうした、従来の研究を参考にしつつ、本稿は、国家形成史の観点から初期コムソモールをめぐる政治過程を考察の対象に設定する。故に、ティラドの研究では扱われているコムソモール活動の実態的側面は検討の対象からはずし、コムソモールの組織的地位をめぐる各政治主体の思惑や意図のからみあい、対立、論争を分析の中心に据える。しかも、その政治主体の分析に際しては、トゥルシチェンコが党の論理や党指導者の議論を中心に置き、ティラドがコムソモール内反対派寄りの議論を展開するのに対して、よりバランスのとれた叙述を心掛ける。しかしその上で、筆者は、コムソモール指導部、とりわけシャツキン(Л. А. Шацкий 1902-1937)*の議論に注意をむけた。その理由は、彼の主張にこれまで十分光があてられていないことに加えて、シャツキンの議論では、革命後形成されつつある国家秩序の問題が明確に意識され、しかもその関連でコムソモールの位置や役割が考慮されており、本稿の課題設定からみれば、極めて重要な分析対象に位置づけうるからである。

*本稿では、青年組織の指導者・活動家のイメージをつかむ一助として、判明する限り、その生没年を付記した。

(1) 日本のロシア革命研究の現況は、高橋清治「ロシア革命——研究史・課題・方法」『ロシア史研究』第四四号、一九八六年、を参照。また、近年の代表的作品として、辻義昌『ロシア革命と労使関係の展開』御茶の水書房、一九八一年、山内昌之『スルタンガリエフの夢』東京大学出版会、一九八六年、中井和夫『ソヴェト民族政策史』御茶の水書房、一九八八年などがある。

(2) 石井規衛「国家と農民」『土地制度史学』第九〇号、一九八一年、二二頁。その他、氏の一連の論文として、同「革命ロシアにおける党」『国家』体制の成立』『社会運動史』第九号、一九八一年、同「ロシア革命からソヴェト国家へ——指

- 導集団と活動家大衆（一九一七年九月—一九一八年五月）『歴史学研究』第五一五号、一九八三年、同「ロシア革命研究の新しい方法——ロシア革命から党—『国家』体制の成立へ」『ロシア史研究』第四六号、一九八八年などがある。
- (3) 和田春樹「ロシア革命に関する考察」『歴史学研究』第五一三号、一九八三年、五頁。
- (4) 国家形成の問題を意識した最近の論文・著作として、西山克典「ロシア革命と地方ソヴェト権力——党制政治システムの形成によせて」『スラヴ研究』第三二号、一九八五年、藤本和貴夫『ソヴェト国家形成期の研究 一九一七—一九二一』ミネルヴァ書房、一九八七年。
- (5) 筆者は、内戦を経て成立してくる「ソヴェト国家」を、一つのシステムとして、すなわち、共産党を指導的中核とし、国家機構としてのソヴェト、労働組合やコムソモールなどの大衆団体（社会団体）の機能分業関係にたつ体系的秩序として、とりあえず理解している。この点につき、塩川伸明「スターリンのプロレタリアート独裁論」『思想』、一九七七年一月号、同「ソヴェト史における党・国家・社会」溪内謙・荒田洋編『スターリン時代の国家と社会』木鐸社、一九八四年を参照。また和田春樹氏は、三〇年代に成立する体制について、「共産党と国家と社会団体の三位一体的結合」とか、「党・国家・社会団体の一体化した体制」といった表現で論じており、参考になる（和田春樹『私の見たペレストロイカ』岩波書店、一九八七年、二三〇頁）。なおソ連の政治学は、上記の「ソヴェト国家」について、ソヴェト社会の「政治システム」という概念を用いる。この点については『Краткий политический словарь』М., 1987, стр. 345—346を参照。
- (6) ソ連のコムソモール研究者によれば、一九七六年二月一日現在で、コムソモールをテーマにした学位論文は二一の博士論文も含めて八二七もあった（В. И. Большаков. Комсомол в политическом системе развитого социализма. Кишинев, 1978, стр. 5）。さらに中央・地方で出版される概説書の類を含めると、その数は膨大である。しかし、ソ連の歴史学に顕著であった政治的制約性ゆえに、管見の限りでは見るべき研究は多くない。
- (7) И. Трущенко. Партия и комсомол. 1918-1920. Горький, 1966. 44頁に、そのテーマをより理論的に論じたものとして、Его же. Источники силы. Партия—организатор и руководитель комсомола. М., 1973.
- (8) しかし、最近の「歴史学におけるペレストロイカ」の動きは、コムソモールの史の領域にも及びつつあるようで、「党の指導」を論証することに終始したコムソモール研究のあり方に対しても、批判的な見解が登場しつつある。コムソモールの史家ガラガンは、コムソモールをテーマにした一〇〇〇点にも迫る学位論文が蓄積されているにもかかわらず、「量は質に転化していない」と批判し、その主要原因の一つが、テーマの狭隘さ、つまり「コムソモールに対する党の指導」というテーマが支配的なことであると主張した。無論彼においても、そのテーマが重要であることは否定されないが、しかし

そのテーマで書かれた論文が「アジビラ аплика」の水準にとどまっておらず、質が良くないと切り捨てられている（《Комсомольская правда》, 22 Декабря, 1987 г., стр. 1-2）。同紙は、さらに歴史学博士候補キプリアーノフの見解を載せた。彼も、コムソモールの力は党の指導にのみあるのではなく、「なによりも、若い世代の利害・要求・要請を反映し守ることに、またそれらを社会の課題と結びつける能力にかかっている」と述べ、コムソモールの利益団体としての性格に力点をおいた。しかし現状では、「この領域は「最も人気のない」テーマとなっていて、研究者の視野から抜け落ちて」と総括した。さらに、「トゥルシチェンコに対しても批判を加え、彼が中心となって牛耳る学会の雰囲気痛烈に非難した」（《Комсомольская правда》, 4 марта, 1988 г., стр. 2）。しかし、今のところ、新しい視角に基づく研究は現れていないようである。

(9) Ralph T. Fisher, *Pattern for Soviet Youth: A Study of the Congresses of the Komsomol, 1918-1954*, Columbia U.P., 1959.

(10) Isabel A. Tirado, *Young Guard: The Communist Youth League, Petrograd 1917-1920*, Greenwood Press, 1988.

一 コムソモール前史

——一九一七年革命における青年組織——

本章では、第二章以下で考察されるコムソモールをめぐる論争の背景を探る意味から、コムソモールの組織的起源をなす一九一七年革命における青年組織の動向を概観し、当時の青年組織の組織目的に内在した二つの方向性——個別利害の主張と、より普遍的な歴史過程への参加要求——を明らかにしておきたい。⁽¹⁾

ペトログラードの場合

二月革命の勃発と、それにとともなう政治的自由空間の拡大は、種々の政治的・社会的組織の噴出をもたらした。ソ

ヴェトや工場委員会はもとより、それらの成人組織では自己を表現できないと考えた青年達が創設した青年組織が、ペトログラードやモスクワなど大都市を中心に形成された。

ペトログラードでは、金属工業労働者が集中したヴィボルグ地区の「ロシア・ルノー」工場において、成人労働者との賃上げ率格差に反発した未成年労働者（一八歳未満）が、経営者や工場委員会に圧力をかけるために自己の組織化を進め、その動きが他の工場へと拡大していく形で運動の端緒が切り開かれた。そして六時間労働（6-часовая рабочая день）といった労働条件の改善や文化・教育的要求等を掲げてメーデー・デモに参加することを他の地区にもよびかける試みが展開されるなかで、五月一四日に「ペトログラード・プロレタリア青年組織『労働と光』（以下「労働と光」）が設立された。「労働と光」は、その最盛期には約五〇、〇〇〇人の青年労働者を抱える大衆的青年組織であり、その組織編成上の特徴として、ペトログラード市内各地区青年組織の連合体的性格を指摘できる。つまり、「労働と光」指導機関＝全地区評議会は各地区の代表者から構成されていた。そして、代表者の多くは各党派に帰属した活動家であり、全地区評議会は党派横断的な性格を有していた。⁽²⁾

このように青年労働者自身の利益表出が組織化の契機をなしたが、この組織の最高指導者に就いたのは、より文化・啓蒙団体的性格の組織をめざす、自称「無党派社会主義者」シェフツォフ（П. Шевцов）であった。彼は、「労働と光」構成員が十代の中・後半であったのに対し、当時すでに二六才と一〇歳前後も年長であり、とりわけ「労働と光」中核地区であるヴィボルグ地区の青年労働者に大きな権威を持っていた。⁽³⁾彼の作成した「労働と光」綱領は、自立した教養ある市民を育成することに組織の目標を置き、その関連で、シェフツォフは「労働と光」構成員に対し、党派的・政治的問題に係わることを回避するよう求めた。⁽⁴⁾

しかし、「労働と光」構成員の多くは、労働条件の改善とか教育機会の拡大等に大きな関心を向けており、「労働と光」指導部、とりわけシェフツォフにその目標を達成するための具体的活動方針がないことに対して徐々に不満をつ

のらせていた。⁽⁵⁾ 一方「労働と光」を構成する各地区青年組織のなかには、例えば、ボリシェヴィキ党員であるアレクセーエフ(B. П. Алексеев 1896-1919)やスクリンコ(И. В. Скрипко 1901-1943)の指導するナルヴァ・ペテルゴフ地区青年組織「労働者青年社会主義同盟」のように、ボリシェヴィキのイデオロギー的影響を強く受け、政治行動に積極的に係わることを求める組織もあった。⁽⁶⁾ さらに「労働と光」の外部にも、後にコムソモール議長になる若いボリシェヴィキ党員ルイフキン(O. Л. Рубин 1899-1937)らにより指導されたメジライオン(地区間)青年組織が設立され、一八才選挙権の獲得をその主要スローガンに掲げつつ、「労働と光」に代わってペトログラードの全地区を横断する組織をめざした。⁽⁷⁾

こうした「労働と光」内外の対抗的力関係を大きく変えていったのが、七月デモに象徴されるような革命の急進化であった。ソヴェト権力の樹立を求める七月デモに「労働と光」構成員が多数参加したのは、彼らが徐々に文化・啓蒙的活動だけでは満足できずに政治化していた徴候であった。しかし、シェフツォフ自身はこうした政治行動に強く反対し、構成員の意識との乖離を深め、そのことが彼の権威失墜を招来した。⁽⁸⁾ さらにナルヴァ・ペテルゴフ地区を中心とする「労働と光」内部の急進派グループによる攻勢が強まり、「労働と光」から多くの地区組織が離脱し、八月五日、「労働と光」は解散に追い込まれた。⁽⁹⁾ 代わってメジライオン組織と「労働と光」を離脱した各地区青年組織の間で「ペトログラード労働者青年社会主義同盟」が設立され、その第一回協議会が八月一八日に開催された。この会議には一三、〇〇〇人を代表する一七九人が出席した。「労働と光」の最盛期五〇、〇〇〇人に比べると少ないが、それでもペトログラードのかなりの青年労働者を結集していた。⁽¹⁰⁾ 最後まで「労働と光」内にとどまったヴィボルグ地区の青年達も一〇月革命までにはこの組織に加わり、構成員は増大する。⁽¹¹⁾ 会議ではボリシェヴィキ党の代表者が演説し、ボリシェヴィキ主導の下に議事が進められて、階級闘争、社会主義のための闘争を進める組織として自己の組織的性格を確定し、「労働と光」との違いを印象づけた。選出された指導部には二人のアナーキストを除いて全てボリシェヴィ

キ黨員がはいり、ここにもポリシエヴィキの影響力の浸透が現れていた⁽¹²⁾。こうして、二月革命以後形成されたペトログラード青年組織は、当初の組織的性格を失って、「ポリシエヴィキ化」していった。

モスクワの場合

一方モスクワでは、ペトログラードの動きとは異なる経緯で青年組織の形成が進んだ。ペトログラードの「労働と光」が、大衆的青年組織として、また少なくとも当初は党派横断的組織として自己を定立していたのに対し、モスクワでは、全体としてみると大衆的青年組織設立の動きがやや緩慢であった。大衆的基盤の欠如もおそらく関係して、党派を包みこむ形で青年組織が形成されず、各党派が個別に組織化を進めるといふ展開をみせたことにモスクワの大きな特徴があった。

とはいえ、モスクワで大衆的組織化の模索がなかったわけではない。モスクワの中では比較的金属工業が集中したザモスクヴォレーチエ地区は、早くからその試みが行われた一例である。三月に、青年労働者の経済的・法的利益擁護や文化的余暇の要求を掲げた「若き青年同盟」がザモスクヴォレーチエ地区のミヘリソン工場で結成され、それは五〇〇人く六〇〇人程のメンバーを集めた。この組織は、四月のいわゆる「ミリュコフ覚え書」に憤激して生じたデモへの青年労働者の参加問題、すなわち政治行動への関与をめぐる分裂し、その片方がポリシエヴィキのイデオロギー的影響の強い「労働者青年同盟」を設立して大衆獲得のための行動をザモスクヴォレーチエ地区の各工場で展開した⁽¹³⁾。その活動は、六月二四日の、ザモスクヴォレーチエ地区全体の青年労働者集会開催に結実し、そこで『第三インターナショナル』ザモスクヴォレーチエ地区労働者青年同盟⁽¹⁴⁾の設立が決定された。この組織は、広く青年労働者の結集をめざすことを規約で定めていたが、七月の時点でその構成員は一、五〇〇人程度にとどまり⁽¹⁵⁾、ペトログラードに比較すれば大衆化の進展は弱かった。しかし、大衆的組織化をめざす動きが他の地区にも広がり、各地区で

「第三インターナショナル」の呼称をもつ青年組織の形成が見られた。⁽¹⁶⁾

他方メンシェヴィキやエスエル系の青年組織も一定の地歩を獲得していた。「労働者青年社会主義同盟」という青年組織が影響力を発揮し、そのため「ザモスクヴォレーチエ地区第三インターナショナル青年同盟は、地区の青年大衆全体をわがものにするのができなかった」と言われる。⁽¹⁷⁾「党派を越える」ことを組織原理にしたこれらの青年組織の数的規模は不明であるが、「第三インターナショナル青年同盟」に拮抗していた模様である。

しかし、大衆化をめざす青年組織の他に、モスクワにはボリシェヴィキ党委員会直属の青年組織も存在した。「ボリシェヴィキ党モスクワ委員会付属青年同盟」（以下党付属青年同盟と略す）がそれである。この組織は、ボリシェヴィキ学生党员を中心に設立されたもので、加入資格がボリシェヴィキ党员およびシンパに限定され、二〇〇人程度の構成員をもつにとどまった。それゆえ「第三インターナショナル」青年同盟以上にボリシェヴィキの影響が強く、党のイデオロギー的・組織的指導下に置かれていた。⁽¹⁸⁾後にコムソモール指導者として活躍するシャツキンは、この組織の創立時からのメンバーである。

七月末から開かれたボリシェヴィキ党第六回大会は、青年組織の問題について部会を設け、全体会議でもこのテーマで討論の時間を持ち、青年組織の取り込みに大きな関心を払った。⁽¹⁹⁾それは、他党派に比べて、ボリシェヴィキ党が革命の担い手として青年層に強い関心を寄せていることを示すものであった。ここでボリシェヴィキ党としての青年組織に対する方針を示す決議が採択され、ここでは、「青年労働者が、党に組織的に従属することなく精神的にのみ結びついた自立した組織を創設することを切望する」⁽²⁰⁾とされ、党付属青年同盟のあり方が否定的に取り扱われた。それを受けて、党付属青年同盟と「第三インターナショナル」青年同盟の合同が模索され、ようやく一〇月八日に両組織合同の大会が開催され、大衆組織をめざす「第三インターナショナル」モスクワ労働者青年同盟として合体した。⁽²¹⁾この組織は、一〇月一五日に、青年インターナショナル・ビューローの呼び掛けに呼応して、「戦争反対」のスローガン

を掲げた青年デモを組織した。一〇、〇〇〇人が参加したといわれるこのデモでは、上記のスローガン以外に「全権力をソヴェトへ」といったスローガンも掲げられてポリシェヴィキの影響力が示されるとともに、折からの革命の急進化を受けて、このデモにはメンシェヴィキやエスエル系の青年組織に加わる青年労働者も参加し、それらの組織の指導者は、構成員の「ポリシェヴィキ化」をおしとどめることができなかった。⁽²²⁾

このようにして、ペトログラードとモスクワでは青年組織化の経緯には相違があったものの、両者とも、青年組織がポリシェヴィキの影響力の下に置かれ、政治行動、革命行動へと活動の重点を傾斜させていった。

一〇月革命への参加

コルニローフ反乱以後、日増しに影響力を強めるポリシェヴィキは、武装蜂起の準備に着手し、その主要な担い手となる赤衛隊の組織化を進めた。その際、ポリシェヴィキは青年労働者や青年組織にも注意を向けていた。九月二四日のポリシェヴィキ・ペトログラード委員会の会議は赤衛隊強化について論議したが、そこで「この目的のために労働者青年社会主義同盟を利用する必要がある」と言及された。⁽²³⁾レーニンも、党中央委員会へむけた手紙「一局外者の助言」において、「もっとも決意ある分子（われわれの『突撃隊員』と青年労働者、さらに水兵のもっともすぐれた分子からなる）を選抜して小部隊に編成し、すべての最重要地点の占領に当たらせ、またいたるところで、すべての重要作戦に参加させること」（強調原文）を主張していた。⁽²⁴⁾

このように武装蜂起が差し迫るにつれ、青年組織の活動は蜂起の準備に収斂された。各地の青年同盟は革命行動のための組織にかわり、赤衛隊の会議には青年組織の代表も加わった。⁽²⁵⁾蜂起直前の一〇月二四日の同盟ペトログラード委員会の会議には党ペトログラード委員会の代表が出席し、蜂起の日程を伝えた。そして若いポリシェヴィキ、スコリンコ起草の決議が採択された。その決議は、「ブルジョアジーとの決定的戦いの時がきた」ことを告げ、全同盟員に

「新世界のための戦士の列に加わる」よう呼びかけていた。そして、決議の最後は、「ソヴェト権力万歳」「レーニン万歳」で締め括られていた。⁽²⁶⁾

モスクワでも、ペトログラードと同じく青年労働者の赤衛隊への編成と軍事教練が進められた。そして一〇月二四日に「第三インターナショナル」労働者青年同盟モスクワ委員会の臨時会議が開かれ、その決議には臨時政府打倒とソヴェト権力の樹立が謳われるとともに、「差し迫る反革命派との軍事衝突に参加するよう」同盟員に義務づけた。一〇月二五日にペトログラードで蜂起が始まると、モスクワでも軍事革命委員会が組織され、地区や企業レヴェルのそれには同盟員も加わった。⁽²⁷⁾一〇月二六日に戦闘が現実のものになると、青年同盟は赤衛隊へのコミットをさらに強める。一〇月二六日のザモスクヴォレーチエ地区労働者青年同盟アクチヴ集会は、「蜂起に参加すること、地区軍事革命委員会に自身の力を引き渡すこと」を決議した。⁽²⁸⁾また同日開催されたモスクワ全市労働者青年同盟アクチヴ集会でも、武装部隊を組織し、赤衛隊に加わることを呼び掛けた決議が採択され、それは、「街頭へ！ 武装せよ！ バリケードへ！」という呼び掛けで結ばれていた。⁽²⁹⁾

他の党派は、青年達のこうした革命行動への参加を、ボリシェヴィキのプロパガンダに騙されているものと理解したが、それに対して、ペトログラード労働者青年同盟の指導者アレクセーエフは、「青年労働者と赤衛隊」と題する文で反駁した。

青年労働者は、労働者階級と貧農に立脚し、彼らの自由で断固たる意志を表現した労働者・兵士・農民代表者ソヴェトの権力のみが、国際プロレタリアートの完全なる同意をもって平和のための決定的闘争を遂行しうることを、また苦しんできた農民に土地を与え、生産に対する労働者統制を施行し、この意志に所有階級を従わせうると理解している。そしてこのことが、我々若い同志たちが……赤衛隊の列に大胆に喜んで殺到した理由である。彼らは、自分自身の意志で、自身の革命的義務を遂行することを断固確信して、死へと進んだのだ。『イェジンストヴォ』〔メンシエヴィキ系新聞〕が書くように、ボリシェヴィキの

指導者が彼らを送り込んだのでは全くない⁽³⁰⁾。

この一文は、一〇月革命直後の最も革命的気分の高揚した時期に、若きボリシェヴィキ党員によって書かれたものであり、これに全ての青年の気分を代弁させることは必ずしも適當ではなからう。しかし、一〇月革命直前に、クラスナヤ・プレスナヤの青年組織が、「もしボリシェヴィキ党が労働者大衆を戦闘へと導かないならば、青年労働者はボリシェヴィキ党を自らの指導者とみなすことをやめ、党に恥辱と呪詛を浴びせ、行動への指導を自ら握る⁽³¹⁾」という決議を提出しているように、当時の青年労働者の間にはかなり急進的な気分が存在したことも否定できない。おそらく二月革命から一〇月革命にいたる事態の推移の中で、青年達の気分や思考様式は大きく転回していったものと考えられる。すなわち、二月革命後に進められた青年達の組織化の動機は、労働条件の改善とか文化的・教育的機会の拡大といった青年労働者の個別利害の主張にあり、同時に、二月革命以前にはなかった自身のコミュニティを築くことにあった。自身の組織を作って団結し、それを通じて工場経営者やあるいは工場委員会に圧力をかけ、賃上げや六時間労働を実現しようとした。さらに、教育を受けることによって技術を身につけ、現存の工場秩序の中で、熟練労働者等のよりよい地位に就くことを夢見ていた⁽³²⁾。しかし、徐々に、彼らは、現在の秩序の下では、資本家の支配する工場秩序及び臨時政府の下では、自身の要求が実現されないとの認識にたつようになった。アレクセーエフの一文の基調にある階級闘争の枠組みで社会を把握するようになっていった。ソヴェト権力の樹立こそが、労働者階級の支配を実現し、自身の要求を実現させるものと思われた。そうした認識の変化にもなつて青年達は政治化し、青年組織の再編の動きを支持するとともに、革命行動に積極的に係わるために、赤衛隊に向かったのである。

一〇月革命は、青年達にとって、自己利益実現の前提条件であったと同時に、より普遍的な歴史の展開に自ら参加したいという欲求を果たす対象でもあった。

- (1) ロシア革命における青年組織及びより広い意味での青年運動は、単にコムソモールの「前史」として扱われるべきものではなく、別個の考察を要する。しかし、本稿は革命以後に設立されるコムソモールを検討することに主眼があるため、その視角からの検討にとどめざるをえない。より深められた包括的分析は他日を期したい。一九一七年革命期の青年運動・青年組織の代表的研究として、ン連では、А. Н. Апаркин. Жизнь и борьба рабочей молодежи в России. М., 1976 があり、欧米では、D.Koenker, "Urban Families, Working-class Youth Groups, and the 1917 Revolution in Moscow," in David L.Ransel ed., *The Family in Imperial Russia*, Illinois U.P., 1976 が、「都市化」の観点からモスクワ青年労働者の組織化の動機について説明している。またペトログラーズの青年組織については、テイラーズの研究が詳しい。その他、S.A.Smith, *Red Petrograd: Revolution in the Factories 1917-18*, Cambridge U.P., 1983 がペトログラーズの青年組織について若干言及している。
- (2) Г. Дрягов. На пути к комсомолу. Л., 1924, стр. 31-37.
- (3) シェフツォフの高い弁舌能力についての指摘が、И. Скоринко. Комсомольцы Октября. Л., 1924, стр. 49 にもある。「労働と光」という名称の提案はシェフツォフのものである(Там же)。また、シェフツォフの影響力の一例としては、全地区評議会の幹部会(四名で構成)がシェフツォフの自宅で開かれていたことを指摘できる(Дрягов, Указ. соч., стр. 39)。ソヴェトの歴史家の彼に対する評価は低く、アツァルキンは、彼を、ブルジョアジーが青年運動に影響力を持つようとして利用した人物として描いている(Апаркин, Указ. соч., стр. 219)。
- (4) 綱領文書全体は、О. Рывкин. Очерки по истории ВЛКСМ. М., 1933, стр. 167-174 にもある。
- (5) Дрягов, Указ. соч., стр. 41.
- (6) この組織の概要は、Скоринко, Указ. соч., стр. 27-33 にもある。
- (7) メジライオン組織についての概要は、О. Рывкин. "Из моих воспоминаний," 《Молодая гвардия》, No. 10, 1928 г., стр. 173-178 にもある。
- (8) Дрягов, Указ. соч., стр. 56-57.
- (9) 「労働と光」解散直前の紛糾した状況を生き生きと描いた回想が、Октябрь революции молодежь: Участие молодежи в октябрьских боях 1917 года в Петрограде и Москве. М., 1987, стр. 41-42 にもある。その他、Дрягов, Указ. соч., стр. 48 にも参照。
- (10) Апаркин, Указ. соч., стр. 308-311.

- (11) 一〇月時には二〇〇〇〇人の構成員がいた模様だ。А. Шохин. Краткая история ВЛКСМ. М., 1928, стр. 44 参照。
- (12) Аларкин, Указ. соч., стр. 309-310.
- (13) Там же, стр. 237-239. *たこの一連の活動を中心的に担ったバックラノフの回想が Наше рождение. М., 1933, стр. 67-73 参照。
- (14) Октябрь в Замоскворечье. М.—Л., 1957, стр. 200.
- (15) А. Аларкин. "возникновение союза рабочих молодежи в Петрограде и Москве." (Вопросы истории), No.12, 1956 г., стр. 49.
- (16) Очерки истории московской организации ВЛКСМ. М., 1976, стр. 35-37.
- (17) Наше рождение, стр. 62.
- (18) 党付属青年同盟創設に至る経緯については、そのメンバーの一人ズヴェーレフの回想が、Там же, стр. 31-37 参照。*た' Там же, стр. 50-56 も参照。
- (19) 部会の議事録は残されていない。全体会議における討議の様子は、Шестой съезд РСДРП /6/. июль-август 1917 г., протокол. М., 1958, стр. 181-191 を参照。
- (20) КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК. т. 1, М., 1983, стр. 592.
- (21) Аларкин, Указ. соч., стр. 323.
- (22) Наше рождение, стр. 63-64.
- (23) Октябрьское вооруженное восстание в Петрограде. М., 1957, стр. 188.
- (24) 『レーニン全集』第二六卷、大月書店、一九五八年、一七九頁。
- (25) Октябрьское вооруженное восстание в Петрограде, стр. 192.
- (26) Аларкин, Указ. соч., стр. 381.
- (27) Очерки истории московской организации ВЛКСМ, стр. 54-55.
- (28) Октябрь в Замоскворечье, стр. 207.
- (29) Очерки истории московской организации ВЛКСМ, стр. 56. 限定的なサンプル資料に基づいた研究によれば、Петроградでは赤衛隊員の約二八%が二〇才以下の青年であったと推定されている (В. И. Старлев. Очерки по истории петроградской красной гвардии и рабочих милиции. М., 1965, стр. 265)。Петроградの第一市区の赤衛隊指

導者であった人物の回想によると、赤衛隊員の大多数は一七〇二四才の若者であったという（И. М. Лапин. "Октябрь в Петрограде: Из воспоминаний бывшего начальника Красной гвардии 1-го городского района Петрограда." «История пролетариата СССР», No. 11, 1932 г., стр. 96）。モスクワでは、一〇月革命の時点で約六、〇〇〇人の赤衛隊員がおり、その大多数は青年労働者であったとの指摘がある（Октябрь революции молодежи, стр. 153）。全国的には、赤衛隊員総数の四一％が二二才未満の青年により構成されていたと言われる（Аларкин, Указ. соч., стр. 401）。このように、数多くの青年達が、赤衛隊といった革命の武装部隊に加わることで、一〇月革命に積極的に参加したものと思われる。なお、赤衛隊員が若かった理由を、既婚者が部隊から除外されたことに求める見解があり、うなずける。D. Koelker, *Moscow Workers and 1917 Revolution*, Princeton U. P., 1981, p. 338 を参照。赤衛隊に関する欧米の研究として代表的なものに、Rex A. Wade, *Red Guards and Workers' Militias in the Russian Revolution*, Stanford U. P., 1984 があり、ナン

イドも家族の有無と赤衛隊加入の問題を関連づけている（p. 174）。

(30) Грушенко, Партия и комсомол, стр. 51.

(31) Ефим Ц. Пять лет: Из истории Московской организации Р. К. С. М. М., 1922, стр. 18.

(32) 二月革命前の青年労働者の状態と彼らの将来的希望については、Дригагов, Указ. соч., стр. 13-22 を参照。

二 コムソモールの設立

(一) 一〇月革命後の危機と青年組織

一〇月革命＝社会主義革命として位置づけられたように、そこには、現存する体制を根本的に作りかえ新しい秩序をうちたてるといった積極的意味合いが込められていた。しかし、現実には、一〇月革命は、三年以上にわたる戦争や革命行動がもたらした国家秩序の全面的崩壊を象徴するものでもあり、革命後にはさらなる秩序崩壊が進んだ。軍隊解体の加速化、工場閉鎖、食料危機などに象徴される経済崩壊、といった一〇月革命以前に進行していた危機状況が

さらに深化していった。

また戦争の脅威も解消されなかった。革命ロシアは、ようやく一九一八年三月三日にブレスト・リトフスク条約の調印により戦争から離脱したが、ドイツ軍の脅威は継続し、さらに連合軍や日本の干渉も表面化していた。

加えて、ポリシェヴィキにとってより一層危機感を抱かせることになった現象は、一〇月革命の主たる支持基盤でありその担い手である労働者階級の解体傾向であった。ある統計によれば、ペトログラード工場労働者数は、一九一七年一月から一九一八年四月の間に三五一、〇一〇人から一四八、七一〇人へと激減し、とりわけ金属工の減少には著しいものがあつた⁽¹⁾。モスクワでも、一九一七年に一九〇、〇〇〇人いた工場労働者が一九一八年八月までには約一四〇、〇〇〇人へと減少し、その傾向はさらに進行していたのである⁽²⁾。

労働者の激減にはいくつかの要因を指摘できる。まず、工場閉鎖等の経済崩壊が失業者を大量に生み出し、さらに食料事情の窮迫が都市生活の維持を極度に困難ならしめ、農村との結びつきのある労働者を中心に都市から農村への移住が始まったことを挙げることができる。またこの傾向は、赤軍の創設によっても促進された。旧軍隊は崩壊し、戦争の脅威の下で軍隊の再建を迫られたポリシェヴィキ権力は赤軍の創設に着手するが、赤軍の主たる構成員は一〇月革命を支持し、担った労働者であつた。加えて権力を握ったポリシェヴィキ党は、党や国家機関運営の要員として労働者を抜擢し、そのことも生産に携わる労働者数の減少を招いたのである。

労働者階級の一部である青年労働者もほぼ同様の過程を辿つた。例えば、ペトログラードでは、一九一七年一月一日時点で二八、一七五人存在した未成年労働者が、一九一八年一月一日には一六、七九一人、同年四月一日には九、二二一人に減少して⁽³⁾いた。青年労働者の減少は、彼らを主要基盤とする青年組織に多大な影響を及ぼすことになった。一九一八年一月末に、ペトログラード青年同盟の機関誌『若きプロレタリア』は、「政治的事件が、同盟のより良い力を自身の組織活動から引き離れた。多くの同志は赤軍へと去り、多くの者が党の活動に引き入れられた」と記し、同

じころ、『若きプロレタリア新聞』（『若きプロレタリア』が一時別名で発行されたもの）は次のように論じた。「我が同盟は極度に困難な時期を経験している。大量の失業、アクチヴ活動家の不足、それがわが災禍の主要原因である」⁽⁴⁾。

モスクワでも事態は同様であった。一九一八年三月三十一日の「第三インターナショナル」モスクワ労働者青年同盟の第五回協議会において、同盟活動の現況について報告したクラフチューク（Крaвчyк）は、「我々の前に、同盟の崩壊という事実がある」と指摘した⁽⁵⁾。この協議会参加メンバーについて、後にルイフキンが「そこに以前からの同盟指導者をほぼだれも見ることはない」と語ったように⁽⁶⁾、革命時に青年組織を支えていた指導者が党の活動や戦線へ向かい、青年組織の活動から離れてしまっていた。実際、「第三インターナショナル」労働者青年同盟活動家のバイオグラフィを一瞥すると、一七年革命の時点で二〇才前後であった彼らの中で、一九一八年に白軍との戦闘により死亡したものが多くことに気付かされる⁽⁷⁾。ルイフキンも戦線での活動に従事して、ペトログラードに帰還したのは一九一八年の夏頃であった⁽⁸⁾。また五月一九日に開かれたモスクワ労働者青年同盟の第六回協議会でも同盟活動の困難な状況が語られた。すなわち、以前の協議会で選出された代議員がいかなる活動にも参加せず、会議にも加わらず、活動家不足のために、全活動が一人か二人の手に委ねられているというのである⁽⁹⁾。

一〇月革命の際に武装蜂起部隊であった赤衛隊への青年の高い参加率と同様、赤軍として戦線へ参加する青年の旺盛な意欲が青年組織の指導的活動を不足させ、加えて一〇月革命後深化した経済崩壊が青年労働者の大量失業を生み、青年組織の存続を困難にいたらしめる事態を作り出したのであった⁽¹⁰⁾。第一回コムソール大会（一九一八年一月）でのルイフキンの発言によれば、一九一八年六月の時点で、ペトログラード青年同盟の構成員数は一、五〇〇名程度であったという⁽¹¹⁾。モスクワでも、一〇月革命時の四、〇〇〇人から、第一回コムソール大会時の二、五〇〇人に減少していた⁽¹²⁾。大会直前におそらく組織再建の取組が精力的に行われたであろうことを勘案すれば、より著しいメンバー減少を経たものとも予想されるのである。

こうして、一〇月革命前には青年労働者を多数結集した青年組織は、革命以後の政治的・社会的・経済的危機下で、その組織力を大幅に落としていた。しかし、一〇月革命後の過酷な社会状況は、組織の必要性を従来以上に痛感させたものと思われる。食料危機、住宅難、伝染病の発生等、死の脅威に最も鋭く脅かされたのは未組織の住民であり、中でも、失業で街頭を彷徨い、犯罪に走る青年を救済するための青年組織が二月革命時以上に必要とされたものと考えられる。⁽¹³⁾

ブレスト講和後に生まれた一時的平和は、青年組織活動家のペトログラードやモスクワへの帰還を可能にし、彼らを中心にして組織再建の試みが徐々に開始された。その帰還者の一人であるルイフキンの回想は、ペトログラード青年組織の現況と立て直しの過程、モスクワを含めた各地の青年組織との連絡、そして全国青年同盟大会へと至る経緯について以下のように概略している。

ペトログラードに帰還したルイフキンが目にした青年組織の現状は、まさに壊滅状態に等しいものであった。各区には形だけの組織すらなく、以前から同盟で活動していた少数のアクチヴ・グループが存在するにすぎなかった。市全体の指導的中心であるべきペトログラード委員会には活動能力がなかった。こうした壊滅に近い状態からの脱出を模索すべく、一九一八年六月にペトログラード青年同盟第四回臨時協議会が開催され、そこには未だ健在なアクチヴ全てが集まったという。この会議で、「なんとしてでも同盟を復興させること」が決議されると同時に、全ロシア大会招集のための措置を講ずることが提起された。このことは、協議会が末端組織の再建と青年同盟の全ロシア大会開催とを結びつけて考え、大会を青年同盟復興の契機にする意図を示したものと理解することができる。

ルイフキンを中心とした新ペトログラード委員会は、活動を離れている以前の青年組織活動家の再結集をはかり、各地区組織の再建に精力的に取り組んでいった。その成果あって、チェコ軍団反乱のために活動家の一部を戦線にとられたりする障害があったものの、各地区組織が復興しはじめた、と述べられている。⁽¹⁴⁾

さらに全ロシア大会開催にむけて、モスクワを含めたロシア各地に存在する青年組織の情報収集が試みられた。七月にモスクワで開催された第五回全ロシア・ソヴェト大会にルイフキンが派遣され、そこに集まる各地の代議員から、その地方の青年組織の存否や現況について情報がえられた。同時に、ルイフキンはモスクワ青年組織と意見交換を行い、全ロシア大会招集について一致し、共同行動を展開することが約された⁽¹⁵⁾。

一九一八年八月に、ペトログラードの代表（グレボフ M. Theodor）参加の下でモスクワ県青年同盟大会が開催され、そこで、第一回全ロシア青年同盟大会招集のためのビューローが創設されることが決定された。ビューローには、ペトログラード、モスクワ、ウラル組織代表の参加が予定されていたが、実際の活動はモスクワ組織によって遂行された⁽¹⁶⁾。

全ロシア大会開催の準備過程に、共産党は組織としていかなる対応をみせたのか。ソヴェト史学は党の指導的役割を強調する立場から、党中央がこの過程に多く関わったことを主張する。例えば、レーニンやスヴェルドロフ（B. M. Cepилов）が全国大会招集を青年同盟の活動家に促した⁽¹⁷⁾こと、組織ビューローにクループスカヤが積極的に関与し、しかもビューローが教育人民委員部の建物の一室をあてがわれていたこと、活動資金がクループスカヤを通じて入手されたこと等が指摘されている。先述した一〇月革命後の労働者階級の解体傾向、共産党自体の構成員の減少、さらにはメンシェヴィキ等へと労働者の支持が再度向けられつつある状況の中で、共産党は、権力を維持していくために、自身の社会的基盤の創出を迫られていた。一九一七年一〇月の時点ではボリシェヴィキ党を熱烈に支持し、一〇月革命に一定の寄与をなした青年組織の崩壊を食い止めるとともに、共産党の指導下でそれを再組織化することには、一定の意義があったものと思われる。それゆえ、青年組織を共産主義的装いの下で再生することに関心が払われたことは想像に難くない。とはいえ、後述するように、党が全体として青年組織の重要性を認識していたとは少なくともこの時点では言えず、青年組織重視の姿勢は、おそらく党指導部の一部にとどまっていたものと考えられる。

青年組織の再建をめざす若い党員活動家は、過酷な状況に置かれている青年労働者を組織化する目標を掲げ、共産党指導者の一定の示唆を受けながら、全ロシア大会開催へ向けての活動に従事していった。そして青年組織再生に込められた意図が交錯する中で、第一回全ロシア労働者・農民青年同盟大会が開催されることになった。

(二) 第一回全ロシア労働者・農民青年同盟大会

一九一八年一〇月二十九日〜十一月四日を会期とした、第一回全ロシア労働者・農民青年同盟大会がモスクワで開催された。一〇月革命からほぼ一年を経て、ようやく全国的青年組織形成へ向けての一步が踏み出された。この時間的遅れについて、ルイフキンが「同盟の全ロシア団体が一〇月革命後一年もたつて、また基本的組織発生から一年半もたつてから創設するのに成功したという事実は……運動のこの弱体化によって説明される」と述べたように⁽¹⁹⁾、一九一八年初頭以来の青年組織の崩壊という事態が第一の原因として指摘できる。⁽²⁰⁾ 全ロシア大会開催は、弱体化した青年運動を今一度活性化させる契機となることをめざすものでもあった。

この大会には、二二、一〇〇人を代表して議決権をもつ一七六人の代議員と一九人の審議権のみを持つ代議員が参加した。議決権をもつ代議員の党派別内訳は、共産党員が八八人、そのシンパが三八人、無党派四五人、メンシェヴィキ国際派三人、アナーキスト一人、左翼エスエル一人であった。⁽²¹⁾ 無党派がまだ相当な数にのぼること、他党派が少数ながら存在することが注目されるが、しかし共産党員およびそのシンパが大多数を占め、大会へ向けた代議員の選出過程が共産党員主導の下に進められたことは明白である。⁽²²⁾ 大会は、組織ビューローを代表してモスクワ組織のツェイトリン(E. B. Цейтлин 1898-1937)が開会を宣し、大会幹部会を選出した。モスクワからはツェイトリンとシャツキン、ペトログラードからはルイフキンとゲール(E. Gepp)が幹部会に加わっている。また名誉議長としてレーニン、カール・リプクネヒト、フリードリヒ・アドラーの三人が推挙された。⁽²³⁾

大会の議事は、まず各地の青年組織の報告から始まった。報告に共通の特徴をいくつか列挙すれば、まず第一に、青年組織維持に不可欠な資金の不足、財政困難の訴えが指摘できる。構成員が少ないこともあってメンバーから徴収する同盟費では組織の運営は到底ままならず、報告者の多くは、ソヴェトからの援助を期待し、それが得られないことを批判した。⁽²⁴⁾ 例えば、北部州青年組織代表のドゥガチェフ (M. Дугачев) は、「最も病理的問題……それは財政問題である。州協議会（一九一八年一〇月一〇日開催）ではまさに最初の一声から、各地の青年組織に資金がないこと、ソヴェトが青年同盟になんら援助を与えていないことが判明した。……この協議会では、地方ソヴェトが青年同盟に精神的支持のみならず、物質的支持を与えなければならぬことが決定された」と述べていた。⁽²⁵⁾

こうした発言は、単なる財政上の問題にとどまらず、組織上の根本問題に係わる事柄であった。すなわち、ソヴェトからの財政援助を求める見解が一般的であったことから判断すれば、当時の活動家の間には、青年組織がプロレタリア権力の下では国家組織の一部になるのか、それともそうではないのか、といった重大な問題——青年組織が形成されつつなる国家の中でいかなる位置を占めるのかという問題——について、明確な観念がなかったことがうかがえるのである。

第二の点は、青年組織に向けられる成人労働者や工場委員会からの悪意ある態度であった。ニジェゴロド県からの代議員は、青年労働者への六時間労働導入を図る地区青年組織にたいして、多くの工場委員会がその企てに抵抗したことを指摘した。⁽²⁶⁾ 労働現場での世代的対抗関係は、すでに二月革命後の青年組織化の際にも表面化していたが、その後も重大な問題として継続する。

第三点目は、青年の「戦線への志向」が青年組織の崩壊を惹起しているとの指摘であった。⁽²⁸⁾ ウラル州の代議員は次のように語った。「全てが戦線に突進した。州委員会からすら進みでた。かかる戦線への志向はいまだ強固ではないわが組織に悪い影響を及ぼした。同盟は崩壊しはじめた」⁽²⁹⁾。一方、弱体化した組織からの代議員が、「八月になってよう

やく同盟の全ロシア大会の問題との関連で、我々は我が同盟の組織化を開始した」と述べたように⁽³⁰⁾、全ロシア大会召集を契機に再組織化をすすめる動きも現れていた。

最後にルイフキンは、各地の青年組織の力と資金不足、そして中央と地方の結びつきの欠如を指摘しつつ次のように総括した。「同志諸君、我々には強固な結びつき、単一の規約、単一の活動が必要である。我が第一回全ロシア大会はあらゆる中央と地方の同盟を一体不可分のものに結合することを助けねばならない。困難な状況からの唯一の脱出策は単一の強力なる青年共産主義同盟の創設である⁽³¹⁾」。ルイフキンは、現在の青年運動が抱える困難の原因を、各地の青年組織がばらばらに相互関係を持たずに点在していることに求め、全ロシア青年組織（共産主義的組織）の創出によって問題を克服できるとの考えを表明し、大会の意義を力説した。

この大会の中心課題であり多くの論議を巻き起こしたのは、新たに創設されるべき全ロシア青年同盟の綱領であり、なかでも同盟の名称問題であった。組織の綱領や名称には、その組織の政治的性格が織り込まれる以上、それを確定する討議は、青年組織の今後の路線決定に係わる重要作業であった。要するに、この論争は、未だ多様性を有した種々の青年組織を一定の政治的枠組みの中に統合していく一つの契機となった。

綱領問題について報告したのは、一七年革命期にモスクワ党委員会付属青年同盟で活動し、後に「青年運動の第一の理論家」と位置づけられたシャツキンであった⁽³²⁾。もっとも、彼は綱領に含まれるべき内容に関する全体的構想を述べたにとどまり、具体的綱領草案を明示したわけではなかった。彼はまず、青年運動が歴史的にいかなる意義を持っているのか、という論点から議論を進めた。

プロレタリア革命は長期的なプロレタリアートの運動の賜物であり、そこで青年は大きな役割を演じている。青年はそれ自身の本質において労働者階級の最も革命的部分である。西欧では以前から、労働者党は全プロレタリア運動の運命が青年運動にかかっていることを理解していた。このことは我々によっても認識されねばならない⁽³³⁾。

このように青年運動の歴史的意義に触れた後、次に、青年組織の必要性について西欧の経験を引証しながら、青年の共産主義的教育が青年組織によって行われねばならないこと、また青年が自主的に活動するためにも青年組織が必要なこと、青年労働者の経済的・法的保護の領域で、青年組織の存在が不可欠なことを訴えた。そのこととの関連で、シヤツキンは青年同盟の任務として、労働者・農民青年の間での共産主義思想の普及、文化・教育活動（プロレタリア文化の担い手育成）、青年の経済的利益の擁護などを列挙した。⁽³⁴⁾

後により詳しく検討することになるが、彼の議論は、青年運動の担い手たる青年自身に向けられただけではなく、青年運動を軽視し、青年組織の必要性を考慮しない成人の党員にも照準が合わされていたように思われる。「労働者階級の最も革命的部分」という青年の位置づけや、現在展開されているロシア革命において果たす青年運動の意義の強調は、歴史的営みに主体的にかつ積極的に参加したいという青年の意欲と、その気分を十分汲み入れることのできない成人党員への不満の両面を表現していたのである。

続いてシヤツキンは、綱領の性格をその名称に体现させ、「社会主義の」綱領、「第三インターナショナルの」綱領、「共産主義の」綱領の三つに類型化し、それぞれについて検討を加える形で議論を進めた。社会主義の綱領は、「同盟に右翼的分子をみとめることになり」、「自身の組織に……労働者階級の敵」を引き入れることになるとして否定し、第三インターナショナルの綱領も、「共産主義運動が広範な労働者大衆をまだ全体としてつかんでいなかった以前の時期のことであり、……青年を追い払うことがないよう組織を共産主義と呼ぶことを恐れていた」時期に通用していたのであって、「すでに古くさくなった」として退けた。⁽³⁵⁾そして、共産主義の綱領を選択して、次のように訴えた。

現在、共産主義的労働運動以外に労働運動は存在しないし、労働者階級の中の残余の傾向は全て、革命によって海に投げ捨てられた。現在共産党が全てを指導しており、すでに誰も共産主義者という言葉を恐れない。我々が政治組織でありたいならば、⁽³⁶⁾確固たる共産主義の綱領にたたなければならない。

シャツキンは、共産主義の綱領を提起する一方、共産党との関係については、「我が綱領の中で我々は共産党との連帯 (СОЛИДАРНОСТЬ) を確固として示さねばならない。同時に我が同盟は自立した (САМОСТОЯТЕЛЬНЫЙ) 組織であらねばならない。党の後見は、我が同盟活動の基礎たる青年の自主活動の原則を侵害するだろう」と述べて、党との関係を「連帯」という表現にとどめ、青年組織の自立性をより強く主張していた。またシャツキンは、同盟がまだ自身の政治的立場を確定していない青年を排除しないためにも、「任務においては共産主義的であらねばならないが、その構成によってではない」としたうえで、新たな同盟の名称を、共産主義者 (共産黨員) である青年の組織という意味での「共産主義青年同盟 (СОЮЗ КОММУНИСТИЧЕСКОЙ МОЛОДЕЖИ)」ではなく、青年の共産主義的組織という意味での「青年共産主義同盟 (КОММУНИСТИЧЕСКИЙ СОЮЗ МОЛОДЕЖИ)」とすることを主張した⁽³⁷⁾。

このシャツキン報告に対しては、とりわけ同盟の名称の問題について議論が集中した⁽³⁸⁾。ある代議員は、「共産主義」という同盟の名称は、新たな同盟員を獲得することを困難にするばかりか、同盟員の大量離脱を引き起こすとして反対した⁽³⁹⁾。この議論に会場から拍手が起ったのは、この見解が一定の支持を受けていたことを示していたし、「共産主義」の名称に賛同するある代議員も、「この名称は、我々を大衆から切り離すのではないか……という恐れ」が多くの代議員の「心のなかに」あると語った⁽⁴⁰⁾。しかし一方で、「共産主義」の名称に賛同する意見も相次いだ。ペトログラードからの一代議員は、「共産主義という名称によって」切り離されるのはブルジョアジーと商人である」と強弁し、「我が同盟は共産主義青年から構成される。そこには後ろにはなく、前に進むもの全てがはい入る。そこには、いつでも前進し、プロレトクリトの同志の表現によれば革命の前衛であるところの全青年労働者が入るのである」と、より急進的な発言を行った⁽⁴¹⁾。

他方、名称の是非といった問題にとどまらず、現実の運動自体に言及した代議員も存在した。ペトログラードからのある無党派代議員は、「同盟の名称問題を解決するより前に、過去を振り返って、我々がこの一年の間に何を行った

のかを見つめなければならぬ。……まる一年間我々は何もしなかった」と発言した⁽⁴²⁾。この意見は、同じペトログ
 ラード組織の指導者ゲールにより、無党派の人物の議論であるとして一蹴されたが、青年組織の現状をかいまみせる
 ものであった。

ここで指摘しておくべきことは、この名称をめぐる各人のやや抽象的な発言の背後に、青年運動をいかに展開しか
 つ組織的危機に瀕していた青年同盟をどのように再建していくのか、という課題をめぐる見解の相違が隠されていた
 ことである。つまり、「共産主義青年」という限定的な組織化（党付属の組織も含めて）を志向する見解は、青年運動
 の目的が成人共産党員の運動と基本的に同じで、即座に共産主義建設への参加ということにつながりがちである。一
 方、「共産主義」の名称が組織の大衆化を妨げるという見解は、幅広い青年の組織化に重点が置かれており、明示的で
 はないが、共産主義建設とはひとまず異なる青年運動の個別的な目的や役割の存在を主張していると考えられる。例え
 ば、後者の見解にたつ発言者が、同盟員獲得のためにダンスクラブを開いて、青年の娯楽や集いの欲求にこたえて組織
 化をめざしていたのに対して、前者が「共産主義者は踊らない、戦うのである」と批判したように⁽⁴³⁾、青年の組織化の
 あり方や運動論に大きな相違があったのである。さらに無党派代議員の発言は、より明確に青年運動独自の役割を述
 べているのであって、青年組織が青年自身の個別利害のために何を実行したのか、との観点に立脚していると解釈す
 ることも可能であり、共産主義建設に青年運動の目標が即座に収斂することはないのである。

二月革命以後、とりわけペトログラードでの青年労働者の組織化が、経済的・法的利益擁護や文化・啓蒙活動を媒
 介として、あるいはそれを即目的目標にして行われたように、青年運動にはこの種の目的が独自に存在していた。そ
 れは革命の急進化とともにやや背後に退き、より普遍的な目標を設定した政治的活動（革命行動）が中心に据えられ
 ることになったが、一〇月革命以後、労働者・農民の権力を自称する共産党政権の下で、青年労働者の個別利害（経
 済条件の改善や文化・教育的要求など）の主張は、再度復活してくることになった。共産党員が多数を占めるこの大

会では、青年の共産主義社会建設への参加といった普遍的課題を抜きに考えることはできないが、とはいえ、青年運動、青年組織復活への強い意欲の中には、上記の様々な性格が渾然一体となって伏在していたのである。

討論の最後に再度発言したシャツキンは、まず、名称問題に議論が集中したことに不満の意を表明して、「我々は、名称を綱領から導出するのであって、その逆ではない。名称は同盟の本質を表現しなければならない」と述べた上で、「もし同盟が党と連帯し、共産主義の思想を普及させることに皆が同意するのであれば、我が同盟は共産主義〔同盟〕とよばなければならない」と結論づけた。その総括を前提に、彼は討議に現れた綱領及び名称にかんする見解を三つに分類し、検討した。「多くの者を切り離す」と考えて「共産主義の名称を恐れた」「右からの同志」に対しては、シャツキンは、「量のために、我が組織の質を犠牲にする必要はない」と切り捨て、「同盟を党に従属させようとした」「左からの同志」に対しては、彼は「党の後見は無条件に青年の自主活動の原則を侵害する」と批判した。そして第三の見解として、「私が自分の報告で提案した綱領・名称のみが残っている」と述べ、シャツキンは次のような綱領テーゼを読み上げた。

①同盟は共産党と連帯する。同盟は自己の目標として共産主義思想の普及、労農青年をソヴェト・ロシアの精力的建設へと引き込むことを設定する。

②同盟は独立した (НЕЗВИСИМЫЙ) 組織である。

③同盟はロシア青年共産主義同盟と呼称される。

各項目について投票が行われ、①は二人の棄権を除いて採択、②は全員一致で採択、③は六人の反対、一七人の棄権、多数賛成により採択された⁽⁴⁴⁾。

大会には、綱領全体ではなく、綱領テーゼのみが提出された⁽⁴⁵⁾。このテーゼには、設立される青年同盟の政治的性格が、「共産主義思想の普及」や「ソヴェト・ロシアの建設への引き入れ」という点、そして「共産党との連帯」や「共

産主義」という名称のなかに明瞭に示されていた。一方、青年の経済的・法的擁護や文化的・教育的利益擁護については直接には言及されなかった。⁽⁴⁶⁾ テーゼの採択は、大会での議論に際して表面化した青年運動および青年組織のありかたについての多様な見解の中からある部分（例えば、「共産主義」という政治的性格が青年組織の「大衆化」を妨げ、ひいては青年運動独自の意義の弱体化を招くのではないか、という見解など）が切り落とされ、大会を主導したシャツキンら若い共産党員の方向づけに沿って運動が展開される一步を印すものであった。

しかし、青年組織の「独立」をうたい、共産党との「連帯」という横の関係を主張したこのテーゼには、イデオロギー的にはともかく共産党に組織的に従属する意図はうかがえない。もっとも、共産主義運動の一翼を担うことを目指す以上共産党の指導は否定できず、そのことと組織的独立（自立）とがどのように関係づけられるのか、という問題が残されたままであった。⁽⁴⁷⁾ さらに組織的地位にからむ問題として、組織財政に関する大会決議はコムソモールへの国家援助を要請していたが、この財政基盤の弱さも組織的独立（自立）を脅かす要因となるであろう。

選出された中央委員二二人は、一人が共産党シンパである以外全員党員であった。そして、大会閉会に際して、シャツキンが、「大会を第一回ロシア青年共産主義同盟大会と呼ぶことを提案し」、採択された。⁽⁴⁸⁾ こうして、コムソモールと略称される青年組織が発足した。コムソモールの設立は、二月革命以後開花した各地の多様な性格をもつ青年組織が、一〇月革命以後の弱体化を経て、「共産主義」青年組織という単一の政治的性格に統合されていく出発点であった。

(1) Smith, *op. cit.*, p. 244.

(2) William J. Chase, *Workers, Society, and the Soviet State: Labor and Life in Moscow, 1918-1929*, Illinois U. P., 1987, p. 33. また一〇月革命から一九一八年初頭にいたる時期の経済崩壊や労働者階級の解体状況についての概略は、W.

- G. Rosenberg, "Russian Labor and Bolshevik power: Social Dimensions of Protest in Petrograd after October," in Daniel H. Kaser, *The Worker's Revolution in Russia, 1917*, Cambridge U.P., 1987, pp. 98-131 参照。
- (3) В. Куликов, "Петроградский комсомол в дни Бреста." (Красная летопись), No. 2, 1934 г., стр. 49.
- (4) Рыбкин, Очерки по истории ВЛКСМ, стр. 149-150.
- (5) Наше рождение, стр. 205.
- (6) Первый всероссийский съезд РКСМ. М., 1924, стр. 13.
- (7) Октябрь в Замоскворечье, стр. 343-365 にあるモスクワ青年運動参加者名簿を参照。
- (8) Рыбкин, "Из моих воспоминаний," стр. 178.
- (9) Наше рождение, стр. 206.
- (10) 一九一八年一〇月一〇日に開催された北部州労働青年同盟協議会に出席した代議員は口を揃えて、青年の戦線への移行が同盟員の減少を招いたと述べていた (Ленинское поколение. Л., 1925, стр. 129-133 参照)。さらに同盟組織の在り方をめぐる対立や、ブレスト講和をめぐる対立が同盟の力を弱めていったものと想定される。これについては、ティラドが詳しく (Tirado, *op. cit.*, chap. 2)。
- (11) Первый всероссийский съезд РКСМ, стр. 29.
- (12) Там же, стр. 30-31.
- (13) 内戦の時期の社会状況については、Chase, *op. cit.*, chap. 1 参照。また青年の犯罪率の高さについては、*Ibid.*, p. 59 参照。
- (14) Рыбкин, "Из моих воспоминаний," стр. 178-179.
- (15) Там же, стр. 181-182.
- (16) Наше рождение, стр. 193-194.
- (17) Грущенко, Партия и комсомол, стр. 55-60.
- (18) Меншьеви́киの復活については、尼川創二「メンシェヴィキ党とロシア共産党」『史林』第七一巻、四号、一九八八年七月参照。
- (19) Рыбкин, Очерки по истории ВЛКСМ, стр. 150.
- (20) この点につき、先駆的コムソモール研究者であるフィッシャーは、「ボリシェヴィキがそれを統制できる確信をもちうる

- 前に全ロシア青年組織を確立することは危険であつたらう」と述べ、革命後一年の間、「ボリシェヴィキは、現存するばらばらのラジカル青年グループ内で支配権を獲得し、自身の統制下で種々の地域の忠誠ある青年団体を確立することに集中していた」と指摘している（Fisher, *op. cit.*, p.9）。つまり、党は青年組織への統制を確保したが故に、大会開催に踏み切った、という主張と理解できる。全ロシア大会開催を共産党の側の論理から導き出す見解であり、一定の妥当性がなくはないが、後述するように党の一部指導者を除けば青年組織への関心は薄く、若い党員のイニシアティブにより組織化が進められていた感は否めず、党が組織的に青年組織への支配権を模索していたとまでは言えないように思われる。やや後の記述になるが、第九回党大会へ向けた党中央委の組織報告は、「一九一八年秋に開かれた第一回青年同盟大会は、我々の参加なしに行われた」と述べている（*Дневный съезд РКП / 6 / март-апрель 1920 г. протокол. М., 1960, стр. 505*）。
- (21) *Главный путь Ленинского комсомола. том 1, М., 1974, стр. 120.*
- (22) この時期に、ボリシェヴィキ系以外で一定の影響力を持った青年組織として知られているのは、アナーキスト系青年組織である。これについては、В. В. Кокин. "Борьба партии большевиков против анархистских влияний на молодежь в период октябрь и гражданской войны." в кн.: Октябрьская революция и молодежь. Ереван, 1987, стр. 59-65 を参照。
- (23) *Первый всероссийский съезд РКСМ, стр. 22-23.*
- (24) *Там же, стр. 29-30, 33, 39.*
- (25) *Там же, стр. 40.* この州協議会の決議は以下の通りである。「地方組織の困難な財政状況を確認して、協議会は、地方ソヴェトの側からの青年組織への広範な財政的支援を必要とみなす。」（*Ленинское поколение, стр. 134*）。
- (26) *Там же, стр. 42.* また、「六時間労働への工場委員会の側の示す不満についての記事が、『Петроградская правда』, 3 апреля 1919 г., стр. 4 にある。
- (27) 例えば、ナルヴァ・ペテルゴフ地区で青年組織形成をめざしたボリシェヴィキ党員のスコリンコは、その回想の中で、成人労働者や工場委員会が、「労働者階級の力を堀り崩し、労働者階級の敗北へと導く」という理由で、組織形成を妨害したことを記している。またこうした態度は、ボリシェヴィキ党員の中にもあったと述べている（*Скоринко, Указ. соч., стр. 28-30*）。
- (28) *Там же, стр. 37, 38.*
- (29) *Там же, стр. 34.*
- (30) *Там же, стр. 40.*

- (31) Там же, стр. 43.
- (32) А. Мильяков. "Они были первыми." «Юность», No. 10, 1963 г., стр. 71; Его же. Первое десятилетие. М., 1965, стр. 247-249.
- (33) Первый всероссийский съезд РКСМ, стр. 55.
- (34) Там же, стр. 55-57.
- (35) Там же, стр. 57-58.
- (36) Там же, стр. 58.
- (37) Там же.
- (38) 同盟の名称については、大会前のペトログラードとモスクワ両組織の協議においても抗争点となっていた。ペトログラードが、「共産主義」を推奨したのに対し、モスクワは、「第三インターナショナル」の名称を提示した。モスクワ組織の側は、「ペトログラード組織が「共産主義」という名称によって党付属の同盟を考えているのではないか、と疑ったらしい。最終的にそれが誤解であることが判明して、モスクワ組織はペトログラードの見解を受け入れたという。この点については、Рывкин, "Из моих воспоминаний," стр. 183, 及び "Наше рождение, стр. 194-195 を参照。
- (39) Первый всероссийский съезд РКСМ, стр. 59.
- (40) Там же, стр. 58.
- (41) Там же, стр. 60.
- (42) Там же, стр. 61.
- (43) Там же, стр. 60.
- (44) Там же, стр. 62-63.
- (45) 綱領全体は、大会終了後の一二月にコムソモール中央委員会機関誌『若き共産主義者』に発表された。というのも、大会開催中に、ルイフキン、ゲール、シャツキン、ツェイトリンというペトログラードとモスクワ双方の青年組織の指導者によって、シャツキン起草の綱領草案の検討作業が行われたが、意見が一致せず、大会では、テーゼのみの提出にとどまった。Рывкин, "Из моих воспоминаний," стр. 185.
- (46) 一二月に発表された綱領文書には、利益擁護の問題も同盟の目標として記述されていた(Товарищ комсомолец: Документы съездов, конференции и ЦК ВЛКСМ. 1918-1968. т. 1, М., 1969, стр. 9)。

(47) Первый всероссийский съезд РКСМ, стр. 78-79.

(48) Там же, стр. 62-63.

三 コムソモールをめぐる政治過程

(一) 党・コムソモール関係の模索

ロシア全体を包括する青年組織を自称し、共産主義的性格をうたうコムソモールの設立は、革命以来の青年運動の歴史の一画期をなすものであった。と同時に、それは、社会的基盤の拡大を迫られ、また赤軍への動員や穀物徴発隊に代表される諸政策の実行部隊の強化を要請されていた共産党にとってもとりあえず歓迎すべきものであった。しかし、党の側には、党・コムソモールの組織間関係を含めて、形成されつつある革命後の国家秩序における青年組織の位置・役割に関する観念が未だ充分練られてはおらず、青年組織が必ずしも注目するに足る強固な組織ではなかったことも影響して、当初党のコムソモールへの対応は鈍かった。党・コムソモール関係確立の模索はコムソモール指導部の側に熱意があった。党中央に明確な方針が欠如していることも一因となって、コムソモールのあり方をめぐっては各機関の間で摩擦が生じることになった。

党・コムソモール中央委の交渉

コムソモールの設立をうけて、共産党中央委は、一九一八年一月に地方の党組織宛に、スヴェルドロフ起草の「青年共産主義同盟の組織について」という回状を発した。⁽¹⁾ その回状の基本的目的は、ロシアにおける勤労青年の全組織を単一の組織にまとめあげたコムソモールが成立したことを地方の党組織に周知させることにあった。そこには

コムソモールの政治的性格（共産主義を目標）や組織的性格の一端（党との「接触」をもつが、「自立した」組織であるということ）が示され、地方の党組織が、「青年の自主活動の原則を侵害することなく、地方のコムソモール組織を全面的に支援する」よう求めていた。またコムソモールの規約に合致する年令（二三才未満）の青年党員はコムソモールに加わり、積極的に活動に参加するよう勧奨していた。回状の内容は、「自立した」組織という規定（第六回党大会と同じ）が綱領テーゼとは異なるものの、基本的にコムソモール大会での議論や決議を踏襲したものであった。

回状送付という党中央委の対応は、この回状の冒頭に、「コムソモール中央委員会は、党中央委が地方党組織に回状を回覧するよう依頼している」、と記されていたことにも見られるように、コムソモール中央委の側のイニシアティブによることを感じさせるものであり、党中央委の側にはそれほどの熱意が伺えないものであった。また、共産党の組織自体が後に比すれば未だ中央集権的構造にはほど遠く、加えて内戦下の混乱した状況を考えれば、こうした一片の回状によって、党中央委の方針が地方の党組織に貫徹したとは考えにくい。

そのことを裏付けたのが、一九一九年三月に開催された第八回党大会におけるシャッキン演説であった。コムソモール中央委員会を代表して行われたこのシャッキン演説は、創設されたコムソモールの活動状況を報告するものではなく、青年及び青年組織に真摯な注意を向けることを党組織や成人党員に強く訴えるものであった。彼は、プロレタリアートの国家を作るためには、「ブルジョア体制の偏見」にとらわれず、「革命的精神」に満ちた青年にこそ注目すべきであると議論をきりだし、しかし現状がそうではないことを批判して次のように述べた。

党の多くの者が、おもちゃで遊ぶのに忙しくて大人の邪魔をする子供に対処するように若い同志に対応している。こうした態度は全く許しがたい。わが党大会は、青年運動が党によって支持されているという決定に加え、非常に困難な状況下にもかかわらず青年の中で多大な活動を遂行しているコムソモールの党が支持しているという決定を行わねばならない。

このように党全体の青年および青年組織への軽視を非難し、青年運動の重要性を強調した上で、シャツキンは、この大会が、「青年の間での活動に関する指針と、党組織とコムソモール組織の相互関係に関する指針」をコムソモール中央委と党中央委が共同して近い将来に作成するよう発議することを求めた。⁽³⁾

敷衍すれば、シャツキンは、成人黨員や地方の党組織の青年運動やコムソモールに対する態度を批判しながら、それを改善するためにも、早急に党とコムソモール組織の相互関係の枠組みを策定することが必要であることを訴えていたのである。そして、その訴えには、コムソモールの「独立」や党との「連帯」を唱えるだけでは、運動や組織を維持できない青年組織の力量不足の実情が反映されていたように思われる。

この大会では、シャツキン自身が遺憾の意を表明したように、⁽⁴⁾第六回党大会とは異なり青年問題に関する特別のセッションが設置されず、シャツキン報告に対する討議も行われなかった。青年および青年組織の問題はそれほど重要視されていなかったのである。とはいえ、シャツキンが起草した、「自立的組織」としてのロシア青年共産主義同盟の「存在と発展を必要とみな」し、共産党が「コムソモールに最大限精力的な思想的・物質的援助を与えなければならぬ」とする決議が採択されたことは、党のコムソモールに対する対応の一步前進と評価することもできる。⁽⁵⁾

この大会直後の一九一九年四月に、党の対コムソモール関係の明確化を促すかのように、コムソモール中央委の側から「党とコムソモールの相互関係についての指針に寄せて」との提案が党中央書記局宛になされた。当該期の党・コムソモール関係史の専門家であるトゥルシチェンコは、この提案の中にコムソモールの「党規約への従属」という表現があったこと、そしてもしその提案を党中央が採用した場合には、「固有の綱領と規約を持つ権利を想定した自立的自主活動組織としてのコムソモールの廃止」か、あるいは「党の一セクション、部局への変質」が現実化したであろうと論じ、党がこの提案を拒否したことを高く評価した。⁽⁶⁾彼の議論はアルヒーフ文書に基づくものであり、この提案文書やそれへの評価についてここで具体的に検討することはできない。ただ、トゥルシチェンコの解釈はひと

まず置いて、実際にこうした提案がコムソモールのイニシアティブによってなされたものとするれば、それは、コムソモール中央の側が、党との関係を早急に確定しておきたいという意欲を示したものとも解釈できる。後述する地方・下部党組織とコムソモール組織の軋轢が、その意欲の背後にあったものと考えることが可能であり、シャツキンの党大会での発言の基調とも照応する。

創設大会で選出された中央委員と各県レベルのコムソモール活動家を集めた最初のコムソモール中央委総会（一九一九年四月二六日）を前にして、党中央委とコムソモール中央委の代表者会議が開催され、そこで党とコムソモールの関係について議論があった模様である。そしてここで作成された文書草案が共産党中央委組織局で承認された。⁽⁷⁾ 党中央の側もようやく積極的な対応をみせ始めた様子がうかがわれる。

そして、四月二六日からの第一回コムソモール中央委総会では、党とコムソモールの相互関係に関する決議が採択された。⁽⁸⁾ この総会に党中央委を代表して出席した党中央候補ウラジミルスキー(M. B. Владимирский)は、党中央委員会に対してコムソモール総会で採択された決議について報告した。その内容は、「①青年同盟委員会は共産党の綱領と戦術を承認し、自身の規約をもち、中央・地方の党組織の統制下で活動する。②地方党委員会は、同盟規約に従いつつ、同盟の活動を統制する。③青年共産主義同盟中央委員会は党中央委の直接的従属下にある」というものであった。⁽⁹⁾

党中央委の承認を受けたこの決議に基づくコムソモール中央委と党中央委員会共同指令がより詳細な内容を伴って発表されたのは、一九一九年八月のことであった。⁽¹⁰⁾ 「ロシア青年共産主義同盟とロシア共産党(ボ)の相互関係について」と題するこの共同指令は、⁽¹¹⁾ 先の総会決議を基本的内容としているが、その他にも重要な規定を含んでおり、やや長くなるが検討しておきたい。

それはまず、総会決議①とほぼ同じ内容の、「ロシア青年共産主義同盟は共産党の綱領・戦術を承認し、自治組織で

あり、自身の規約を持ち、中央・地方の党組織の統制下で活動する」という規定で始まる。青年組織が「自治（*ABT-OHOMHIT*）」組織であるとの規定が新しいが、この表現は「自治共和国」の「自治」と同じタームであり、「自立」よりやや弱い性格にも取れる（但し、「自立」なる表現が以後否定されたわけではない）。次に、党組織のコムソモール組織への思想的・物質的援助を明記し、また、二〇才以下の党員は全てコムソモール組織に加入しなければならないとしている。スヴェルドロフ回状（一九一八年一月）では、加入が「勸奨され」たにとどまり、表現は強くなっている。そしてコムソモール組織がまだ存在しない所では、党組織がそれを創設するとされ（もっともコムソモールの規約や指針に従ってではあるが）、スヴェルドロフ回状による「創設を援助する」に比してこれも表現が強い。党主導のコムソモール組織創設という規定は、権力政党たる共産党が、コムソモールを通じた大衆統合をはかる意志を明確にしめたものとも考えられる。これは、革命後形成されつつある、共産党を中心とした国家秩序の一機構としてコムソモールが理論的に位置づけられる端緒を示すものであると言えよう。「コムソモール組織は党組織に対し（動員の際のアジテーションやソヴェト選挙の際のデモの組織化などで）全面的に援助を与えなければならない」との規定もそのことを補完する規定であろう。そして、総会決議②と③を併せて、「コムソモール中央委は党中央委の直接的従属下にある。コムソモールの地方組織は、党地方組織の統制下で活動する」と規定された。そして党とコムソモール双方の組織の相互代表制が定められた。党組織へのコムソモールの代表は、同盟に係わる問題が党組織で討議される際には投票権をもちうるとされた。さらに党のコムソモールへの統制手段として、例外的な場合にとどめられはしたが、コムソモール組織内での党フラクション創設の規定が含まれた。

一方、自主活動が同盟活動の基礎であるから、党の統制は「後見的性格や些事への干渉」になってはならないと歯止めが加えられ、さらに、地方党組織には同盟組織を解散させる権限はないことが明記された。各レベルでの両組織の紛争は上級レベルで解決すべく委ねられることになった。

全体として、党の側からのコムソモール組織への各種の統制規定が含まれており、コムソモールの組織的な自立性
がかなり侵害される可能性を帯びていたと言える。しかし、党の統制規定が逆にコムソモール組織の存在を前提とす
るものであり、地方党組織がコムソモール組織の解散権をもたないと定められたことは、コムソモール組織の存在を
保障したものとさえいえる、青年組織の存在無視や青年運動への軽視に苛立たせられていたコムソモール指導者にとつて
は、一歩前進であったのかもしれない。ともあれ、この共同指令により、第一回コムソモール大会以後模索されてき
た党とコムソモールの組織的關係についての一定の枠組みが、少なくとも双方の指導部のレヴェルでは確立されるこ
とになった。

地方・下部党組織のコムソモール組織への対応

コムソモール指導部の側からの積極的な働きかけもあって策定された一連の党及びコムソモールの決定によって、
青年組織コムソモールの存在とその存在意義が確認され、党組織との関係も少なくとも文言上は制度化されていた。
こうした指令や決定は、地方や下部の党・コムソモール組織に回覧され、周知・徹底がめざされた。とはいえ先にも
述べたように、徐々に固まりつつはあるが、中央と地方の關係は厳格な中央集権体制として一義的に規律化されてい
るわけではなかった。内戦の渦中において、各地方にはその地独自の条件があり、青年組織への一様な対応は必ずし
もなかった。

中央の規定に照応しない対応の一例として、ペトログラード党委員会は、共同指令発表以後の一九一九年一月二
四日の決定で、党委員会に付属する青年部局を設置することにした。⁽¹²⁾ ペトログラード委員会の意図が何処にあったの
か、また委員会が、この部局と現存するであろうペトログラードの青年組織との關係をいかに調整しようと考えてい
たのか詳細は不明である。しかし、少なくとも、青年の間での活動は、党から自立した組織たるコムソモールの専有

事項である（もちろん党はコムソモールの活動に十分な注意をはらわなければならないとされた）ことを含意する第八回党大会の決定や共同指令等が、各党組織の間で必ずしも徹底してはいないことを示していた。

他方、党中央の側にも青年組織に対する態度の混乱があり、それが地方や下部党組織の対応に影響を与えていた。

一九一九年一二月の第八回党協議会は新しい党規約を作成・採択したが、その第一七条に、党付属青年部局創設の権限が地方党組織に存在するかのように読める文言があった。「党活動の特別の形態のために専門部局（民族・女性の間での活動・青年の間での活動）を割り当てる」⁽¹³⁾。このように党中央自身が、おそらく無意識のうちに矛盾した対処をする、青年組織への無関心な態度が残存していたのである。第九回党大会（一九二〇年三月二九日～四月五日）の場で、コムソモール中央委を代表して演説したルイフキンは、この規約の条項が一因となって、アルハンゲリスクやシベリアの党組織が同盟ビューローを解散し、党付属の青年部局を組織していると実例を挙げて批判し、規約からこの条項を削除するよう求めた。そして、ルイフキンが発言した組織部会を統轄していたマクシモフスキー(B. V. Markov-Moskvin)は、ルイフキン発言の正当性を認めて、この条項削除が必要であることを承認した。⁽¹⁴⁾

もっとも党規約の条項は、地方及び下部党組織による青年組織の自立性侵害といった現象の一つの原因にすぎなかった。実際には、党活動家や成人労働者の間に広く見られた青年運動や青年組織に対する軽視した態度がそうした現象の根底にあった。⁽¹⁵⁾ さらに、青年組織が党の統制・指導下にある一方で、その自立性は侵害されざる原理だという「自立と統制・指導」という弁証法的組織関係が、現実のロシアの政治的・社会的実情に照応していなかったことによるものでもあった。これは単に内戦下のロシアという一般状況だけでなく、地方党組織の活動家の思考パターンや行動様式及び財政難等の後述する青年組織に内在する問題性にも関係していた。即断即決を迫られ、軍隊的命令の様式で活動するの慣れた地方の活動家の政治文化からすれば、⁽¹⁶⁾ さほど強力でもない青年組織の自立的活動を承認して、それに間接的な指導を加えるといった組織関係のあり方は、地方党活動家の目には非効率的指揮形態に映ったはずで

ある。実際、第九回党協議会（一九二〇年九月）でクレスチンスキー（H. H. Крестинский）も認めたように、地方で日常的に不足している党活動家を補充するため、青年組織の活動に従事する若い党員を党一般の活動に動員することが頻繁に行われたし、それは不可避でもあった。⁽¹⁷⁾

コムソモール組織の側にも、例えば第二回コムソモール大会（一九一九年一〇月）で、各地方組織の代表者が口を揃えて資金と活動家の不足、そして中央からの援助も含めた強力な指導を訴えたように、自立した組織として振る舞うだけの条件が整っていたわけではなかった。ちなみに組織財政の問題は、第一回コムソモール大会では国家援助を要求していたが、おそらく国家から資金を受けとることの問題性もあって、党組織が財政援助することになった。⁽¹⁹⁾つまり、県の党組織が、県のコムソモールに資金を付与することになったのである。⁽²⁰⁾ 財政問題のこうした解決措置は、党とコムソモールの相互関係に新たな一面を加え、コムソモールの自立性侵害につながる可能性を増大させただろう。

地方・下部党組織によるコムソモール組織への「妨害」は、自身の力量不足がその一原因とはいえ、コムソモール組織の側の不満を引き起こさざるをえなかったし、それがコムソモール不要論に至る場合には、大きな危機感すら抱かせた。例えば、当時シムビルスク県党委員会の議長であったワレイキス（M. M. Вайкис）は、その地方の青年同盟の雑誌『若きプロレタリア』への論文で、青年インターナショナルについて論じる中で「青年共産主義同盟にはなんら特別の任務は存在しない」と述べ、青年組織の必要性を否認する発言をした。シャツキンはワレイキスに対して、それは「青年運動打倒」に至るとして強い不満の意を表明したが、⁽²²⁾ この種の態度は党活動家においてそれほど珍しいことではなかったように思われる。

第八回党大会決議や党・コムソモール中央委員会共同指令等で、コムソモールの組織的承認を済ませていた党中央は、各地で相次ぐ党・コムソモール関係の軋轢に対して、おそらくコムソモール指導部の働きかけもあって、一定の解決の方針を提起した。一九二〇年七月の党中央委の回状「青年の間での活動について」は、地方党組織の青年同盟

の活動への「注意不足の態度」を批判し、党の規約を、コムソモール組織の解散や部局創設の権限を承認したものと理解してはならないと述べていた。また、コムソモールは党の「資源」養成に大きな役割を演じるのだから、コムソモールの若い党員活動家を党・ソヴェト・軍事活動に動員することで、同盟の活動家の隊列を蹂躪してはならないと指令した。⁽²³⁾この回状が即座に地方・下部の党組織に貫徹したと即断することは不適切だが、党中央が、青年運動や青年組織の問題にいままで以上に強い関心を向けはじめたことは確認しうるであろう。⁽²⁴⁾そして、党中央のコムソモールへの関心の高まりは、当該期に登場した世代的対抗意識を強く持つドゥナエフスキー・グループとコムソモール中央委員会の間が生じた激しい論争の帰趨に党中央自身が強い危機感を抱いたことによるものでもあった。

(二) コムソモール内部の論戦

シャツキンやルイフキンなどコムソモール中央委の指導者が、党中央委との交渉による両組織の相互関係の制度化を通じて、コムソモールの組織的地位獲得を試みていた時、各地のコムソモール活動家の間には、コムソモール中央委に対する批判の声が上がりに始めていた。なかでも、ドゥナエフスキー (B. Дунаевский 1903-) を中心としたグループは、コムソモールの主要構成員で当時厳しい経済状態に置かれていた青年労働者の利益擁護の問題を議論や批判の中心に据え、一七年革命時以来の青年組織の本来的役割如何を問うた。そして、ドゥナエフスキーらとシャツキンらコムソモール指導部の論争は、青年労働者の利益擁護の問題にとどまらず、党とコムソモールの関係についての、さらには社会主義国家の下で青年運動・青年組織が如何にあるべきかについての原理的問題を俎上にのせたという意味で、コムソモール史上、そして革命後の国家秩序形成史という観点からも重要な位置を占めるものであった。

ドゥナエフスキー・シャツキン論争

ドゥナエフスキーは、一九〇三年生まれ、一七年革命時にロストフやモスクワで活躍し、コムソモール創設後はモスクワ・コムソモール組織の指導的人物として登場した。コムソモール創設大会では、議事録を見る限りでは発言しておらず（出席の有無も不明である）、中央委員にも選出されていない。彼は中流家庭の出身で、労働経験はない模様だが、労働問題とりわけ青年労働者の経済的・法的保護といった問題についてはコムソモール内で大きな発言権を有していた。⁽²⁵⁾ そのドゥナエフスキーが、一九一九年四月一八日の『プラウダ』に「青年セクツィヤ（Секция молодежи）」と題する論文を発表し、それが契機となって同盟指導部との間に論争が開始された。

その論文の基本的内容は、生産の崩壊に伴う労働者の減少という状況下で、社会主義建設にひきいられるべき活動家を調達するためには、青年労働者に目をむけなければならぬというものであった。そして、彼らを活動家として養成するためには、六時間労働や夜間労働の禁止といった労働条件の改善がまず前提とされるべきであり、それを達成する手段として「労働組合付属の青年セクツィヤ」⁽²⁶⁾（以下労働組合青年部）の創設が不可欠だ、というものであった。⁽²⁶⁾ 議論の内容はそれほど具体的ではないが、この見解が四月四日のモスクワ労働組合評議会に提示された際、一定の賛同が得られた模様である。⁽²⁷⁾

労働組合青年部創設の問題は、第一回コムソモール中央委総会（一九一九年四月二六日〜二八日）でも提起され、このテーマを各地方組織で広く討議にかけることが決定された。つまり、当初、コムソモール中央委内で、ドゥナエフスキーの提案が即座に拒否されたわけではなかった。⁽²⁸⁾ しかし、五月一〇日付のコムソモール中央委機関誌『若き共産主義者』にドゥナエフスキー論文「労働者青年ソヴェト（Советы рабочих молодежи）創設にかんする問題に寄せた」が掲載されると、それは直ちに反論を招くことになった。

ドゥナエフスキーの論文は、コムソモールの現状への痛烈な批判を含み、青年労働者の経済的・社会的状態の改善を目標とする労働者青年運動の別のオールタナティヴを提示していた。まず彼は、『官僚的』オプチミズムを捨

てて、公平に真実に目をむける」ことをよびかけた。彼によれば、現在までのコムソモールの活動は「みじめで、好ましくない」ものであって、第一回コムソモール大会で提起された課題を履行しなかったし、コムソモールはプロレタリア青年の大衆団体に成長しなかった、と批判した。彼は世代的対抗を前提にして、青年が自分自身を組織することによる自己救済を訴えた。「ロシアにおける労働者青年運動は、慈善家から成人労働者にいたるまでの様々な後見人が青年労働者自身にとって全く無益であることをはっきりと認識したときに始まった。ここには自身の任務の本能的・健全なる理解があった。プロレタリアートの階層としての青年労働者は、成人労働者に対して一定の反目状態にある。（中略）青年に後見人はいないのだから、自分の利益は自分で守らなければならない。」ドゥナエフスキーはこのような述べたうえで、もし青年が自身の利益を守ろうとするならば、「青年労働者は大衆団体——ソヴェトを創設しなければならぬ」と論じた。彼のいう「ソヴェト」は、いわゆるソヴェトの類推以上のものではなく、その組織の具体的イメージはやや漠然としていた。しかし、ドゥナエフスキーが「コムソモールは大衆団体になりえない」との判断にたつて、コムソモールと別個の労働者青年組織創設を唱えていたことは明確であった。同時に彼は、コムソモールがソヴェト創設のイニシアティブを担うよう求めていたし、コムソモールを青年運動の「照明ランプ」と位置づけてコムソモールと労働者青年ソヴェトの共存を予定していたから、コムソモールの解散を主張していたわけでは必ずしもなかった。⁽²⁹⁾

このドゥナエフスキーの論文に対しては、即座にシャツキンが同じ雑誌上で二度にわたり反論を試みた。⁽³⁰⁾まず第一論文で、彼は、ドゥナエフスキーが労働者青年ソヴェト創設の必要性を動機づける根拠・論理を二点にまとめた。第一に、「青年労働者には自身の階級的利害が存在し、成人労働者の階級的利害と衝突する」という主張、第二に、「コムソモールが大衆的ではなく、そこには意識ある少数の青年労働者だけが加わっている」という主張である。ドゥナエフスキー自身は青年労働者に「階級的利害」があるとは発言しておらず、やや恣意的な解釈ではある。第一の点に

ついでにシャツキンは、「プロレタリアートの一般的階級利益は、その職業的、年令的、その他のグループの特殊利益を完全に吸収する」と述べ、基本的に成人労働者と青年労働者の利害に矛盾は存在しないと述べた。彼も、成人労働者がしばしば六時間労働に抵抗していることを認めるが、しかしそれは階級的利害の現れではなく、双方の共同活動が必要だと論じた。第二の点については、ペトログラード組織の最近の数的増大等を論拠としてあげながら、大衆化しないということを実際に反するものとして退けた。

続く第二論文では、青年労働者の経済的利益擁護の問題が、やや理論的側面から、他のプロレタリア組織との関係で論じられた。ドゥナエフスキーが、青年労働者自身の組織によって、自分で自分の利益を守ることを主張するのに対して、シャツキンは他のプロレタリア組織との「共同活動」を強調した。「ソヴェト権力や労働組合との関係で、この活動領域における青年組織の役割はいかなるものであろうか？（まず第一に）補助的であり、（第二に）成人同志を促すものである。もし青年組織だけがプロレタリア青年の擁護に従事するというのであれば、それはばかげたことだろう。……これはサンジカリズムの見解である。」つまり青年の利益擁護におけるその主導的役割は、プロレタリア権力の下では、青年組織ではなく、プロレタリア国家や労働組合にあると主張された。

プロレタリア国家が青年の経済的擁護を実現しなければならぬ。なぜなら、①この擁護は労働者階級および革命全体の観点から行わなければならないし、この領域に関心のあるグループつまり青年の観点からのみではいけない。②国家装置のみがこの領域で成果をなし遂げうる。こうしたことは全て、我々社会主義者にとっては以前から周知のことである。⁽³¹⁾

このように、シャツキンは、プロレタリア国家成立という前提にたつて、ソヴェト（国家装置）・労働組合・青年組織といった各プロレタリア組織の機能分業について論じ、革命後の国家形成の展開を意識しながら、青年運動を全

プロレタリア運動との関連によって、青年組織を他のプロレタリア装置との関連によって把握するという体系的思考の必要性を説いていた。コムソモールの組織的地位獲得を模索する従来からのシャツキンの発言との関連でより積極的に意味づければ、そこには、形姿を整えつつあるソヴェト国家の中に、青年組織コムソモールの存在を確保したいという意欲が現れていたともいえる。

いずれにせよ、シャツキンの議論は、現在の国家がプロレタリア国家であるとの前提に立つかぎりにおいて、少なくとも理論的にはドゥナエフスキーの見解をしのぐものであった。その他、より具体的な点でも、シャツキンの側やや説得力があった。例えば、コムソモールと労働者青年ソヴェトという二つの組織関係について、シャツキンが「労働者青年ソヴェトと同盟の機能を分けることは実践でははなはだ困難である。加えて同志ドゥナエフスキーは、理論上もそれらを分離していない。……ソヴェトの活動は本質的にも、成功への機会という点でも同盟の活動に類似するだろう」と批判したことには一定の妥当性があったし、双方の組織の共存を想定した場合、現在でも深刻な活動家不足をどう解消するのかという問題もあった。全体的に、ドゥナエフスキーの議論には論理的に若干無理があったことは否めない。

労働者青年ソヴェトという新たな青年組織形態の提案は、今ふれた理論的問題性と関係があったのか、その後ドゥナエフスキー自身によってもあまり言及されなくなり、もっぱら労働組合青年部の主張が中心になった。しかし、この主張にもそれほど賛同が寄せられず、一九一九年七月に開かれた第二回コムソモール中央委員会総会では、労働組合青年部の創設提案は否決された。⁽³²⁾その拒絶の背後には、労働組合青年部がコムソモールと機能的に重複し、そのことがコムソモールの存立を脅かしかねないと考えるコムソモール指導部の危惧があったことが予想される。

しかしながら、ドゥナエフスキーの主張が理論的にはどうあれ、その主張の背景をなした六時間労働等の労働条件改善の遅れや、内戦と戦時共産主義の下で一層過酷さを増す青年労働者の経済的・社会的状態を否定しうることはで

きない。⁽³³⁾そして、青年労働者の大衆的組織には程遠いコムソモールが、青年労働者の現状を改善することに成功していない以上、青年労働者の利益擁護を達成するための方策をめぐる議論は鎮静化しなかった。

ドゥナエフスキーの議論は、コムソモール活動家の一定の共感を呼んだ。なかでも、白ロシアのコムソモール活動家ザンデル (Н. Зандер) は『共産主義のたいまつ』という雑誌に「若い労働者のセクツィヤ (секции юных рабочих)」と題する論文を発表し、ドゥナエフスキーの議論を引き継いだ。彼はコムソモールと労働組合青年部の関係を中心にして、議論を展開した。

共産党——プロレタリアートの先進部分がソヴェトを通じて全労働者階級を自身の側に導き、労働者階級をソヴェトに組織して労働者独裁を強化するのと同様に、青年共産主義同盟は、青年労働者セクツィヤを通じて全青年労働者を結集し、それを強力な不可分の一体に結合し、究極目標たる共産主義への偉大なる階級闘争の道を前進する。⁽³⁴⁾

彼も、ドゥナエフスキー同様、コムソモールは意識的・革命的青年労働者を結集するものであるから大衆団体にはなりえない、との前提にたって議論を展開していた。一方、彼の議論の特徴は、共産党が他のプロレタリア組織を指導することのアナロジーでコムソモールと労働組合青年部の関係を把握していたことである。すなわち労働組合青年部という「大衆団体」を「指導する」コムソモールという論理である。そこには、形成されつつある新しい国家の枠組み——唯一の前衛たる共産党が大衆団体を指導し、それを通じて大衆を統合するというもの——から逸脱する論理が含まれていたことが注目される。しかしその場合、党とコムソモールの関係はどうなるのか、という問題について明確な議論は展開されていない。そして、その点が後に最大の焦点として浮かびあがるのであった。

第二回コムソモール大会における対立

形成されつつあるドゥナエフスキー・グループと同盟中央との論争は、第二回コムソモール大会（一九一九年一月五日～八日）において最初の高揚を迎えた。この大会は、南方からデニーキン軍がモスクワに迫るといふ緊迫した雰囲気の中で行われた。⁽³⁵⁾

大会は、初日にトロツキー（Л. Д. Троцкий）の「現在の情勢」に関する報告等を聞き、二日目から本格的な報告と討議に入った。しかし大会二日目の朝、議長ルイフキンが大会の議事内容を発表すると、即座にザンデルから異議が寄せられ、ルイフキンとザンデルの間で激論が交わされ、非難の応酬があった。大会は、冒頭から先鋭化した対立状況を伺わせるものとなった。

ザンデルの異議は、大会議事に「労働者青年運動の形態」―労働組合青年部創設の問題に関する討議が含まれていないことに向けられていた。大会前の議事策定段階で両者間に交わされた了解に不一致があったようだが、双方の発言から判断すれば、ルイフキンらコムソモール中央が意図的に大会議事からこの問題をはずしたようでもあり、それにザンデルが「デマゴギーだ」と強く反発したものと思われる。⁽³⁶⁾

しかしこの非難の激しさ以上に、双方のやりとりの中には興味深い論点が含まれていた。ザンデルは、同盟内に「労働者青年運動の形態の問題について不一致がある」と主張して、その点を議事に加えるよう要求した。それに対してルイフキンは、「不一致はない」と応対したうえで、「同盟全体は、青年労働者の共産主義的運動の唯一の形態はロシア青年共産主義同盟であると考えている」と述べた。⁽³⁷⁾ すなわち、両者の対立の根底には、革命後、社会主義をめざす国家において、青年運動の担い手は唯一コムソモールだけであるのか、それとも複数の青年組織の併存（競争関係）であり、機能分業に基づくものであれ）が可能なかどうか、という重大な問題が伏在していた。一〇月革命後、青年組織の崩壊状態を経るなかからコムソモールに青年組織が統合されたが、その時切り捨てられた青年運動の論理

や青年組織のあり方が再度ここで問われていたのだと解釈することもできる。

引き続き発言したザンデルの議論では、青年組織の共存（コムソモールと労働組合青年部）の問題が明確な形で語られていた。彼は、コムソモールが青年の大衆団体に成長していないとの現状認識を示し、その理由として、コムソモールの活動が悪いのではなく、コムソモールが同盟加入要件として「高い要求」を提示しており、コムソモールが「先進的前衛」になっているからだと論じた。しかし、コムソモールのそうした現状それ自体は問題ではなく、コムソモールが全青年労働者を結集しようなどと志向するべきでもなく、コムソモールの他に「全青年労働者を結集しうる組織」すなわち「青年労働者のセクション」を創設すべきだ、と持論が繰り返された。⁽³⁸⁾

これに対してルイフキンは、同盟員多数がザンデルの議論に賛成しているわけではないとして、議事としてとりあげることに難色を示し、大会の下部セクションたる「経済・法部会」でこの問題を討議すればよいとのべて、その場をしのいだ。ザンデルの提案は三六人の賛同者があったものの、結局圧倒的多数により否決され、全体会議のなかでは討議されなかった。⁽³⁹⁾この問題は「経済・法部会」に移された。

六〇人が参加したこの部会では、労働保護についてカプルン (C. Kaplyun) が、同盟の経済・法活動についてはドゥガチェフが報告した。両者とも青年労働者を取り巻く状況（労働条件、衛生、住宅その他）に問題があることを前提にしていた。カプルンはソヴェト権力成立以後の青年労働者に対する労働法制（例えば一四才〔後には一六才〕未満の未成年労働者の労働禁止や未成年労働者の六時間労働など）が「素晴らしい宣言」にとどまっていることを認めたらうで、その実行を妨げる要因として、成人労働者や工場委員会の妨害に言及した。「生産性を高めるためには、未成年の助けを利用することが必要だと彼らは考えており、しばしば未成年にたいする六時間労働の導入に反対し、抵抗している」。しかし彼は、かかる抵抗は部分的なものであると主張し、成人労働者や工場委員会全体が、青年労働者の労働保護に反対していると解釈する立場を批判した上で、青年労働者のためだけの労働保護は考えられないとして、

青年労働保護のための特別機関の設置の必要性を否定した。⁽⁴⁰⁾

ドゥガチェフも「青年労働者の悲惨な状態」を認めつつも、ソヴェト政府が青年労働者の状態改善のための措置を講じていること、それが一朝一夕には実現しないことに理解を求めた。そして「青年労働者の経済的権利や利益擁護の領域で、我々の活動がとるべき形態とはいかなるものか」と問題を設定し、「我が同盟によって選出された組織において行わねばならない」と述べて、労働組合青年部という形態ではなく、同盟の工場細胞を基礎にした「経済・法委員会」の設置を提案した。この委員会が労働保護に関係する国家機関や労働組合に代表を派遣して、それらを通じて青年労働者の利益を擁護しようとするものである。つまり、「労働保護、青年労働者の利益擁護の領域での我が活動は、自立した性格、つまりソヴェト権力組織やこの領域で活動する他の労働組織から切り離された性格を持ってはならない」のであった。⁽⁴¹⁾

一方ドゥナエフスキーは、青年労働者に対する労働時間削減が実現しない原因、賃金アップ率の成人労働者との格差の原因を、もっぱら成人労働者や工場委員会・労働組合の抵抗に求めた。その立場から、これらの組織を通じた青年労働者の利益擁護に期待する両報告者の議論に反駁した。ドゥナエフスキーは、青年労働者が自分自身で問題解決に取り組むとき、労働組合青年部に全青年労働者が結集するとき、自身の経済的・法的状態を改善しようと従来の議論を繰り返した。ザンデルも、「青年自身以外にだれが自分をより擁護しうるのか」と述べてドゥナエフスキーの議論を応援した。ドゥナエフスキーらの問題意識の背後にあるのは、青年労働者の生活実態であった。ドゥナエフスキーは工場に留まっている青年のみならず、工場閉鎖で街頭に放り出された失業青年にも目を向け、彼らが様々な犯罪に係わっていることに強い危惧の念を示していた。⁽⁴²⁾

ドゥナエフスキーらの議論は、当時の青年層が置かれた過酷な現状を告発するのに大きな力を発揮した。しかしそれを克服するために打ち出された、労働組合青年部の性格がどのようなものであるのか、いまだ具体性を欠いていた

ことは否めない。おそらくは、大多数の青年労働者を結集して、青年労働者の圧力団体として自己を定立し、労働条件などの独占的交渉当事者たらんとしたものであろう。ただし、そのような強力な地位をどのようにして獲得するのか、また既存の労働組合とどのような関係にたつのかといった問題についてのイメージは漠然としている。「同志ドゥナエフスキーは、いかに試みようとも、労働組合青年部が工場ごとに分散している全労働者青年大衆を収容するかどうかを立証できなかった⁽⁴³⁾」というドゥガチェフの反論はやや無いものねだりであるにしても、ドゥナエフスキーらが、この組織創設の具体的プロセスについて明確な見取り図を示していたわけではなかった。

その意味で、実現可能性がどの程度あったのか疑問なしとはしないし、加えてドゥナエフスキーの提出した決議草案が「コムソモール組織は青年労働者の前衛として労働組合青年部の指導に……積極的に加わる」と記していたように⁽⁴⁴⁾、コムソモールの廃止は想定されてはいなかった。にもかかわらず、コムソモール中央が示した危機感はかなりのものであった。ドゥナエフスキーらの議論に対してドゥガチェフは、コムソモールの他に青年組織を作ること断固として反対の意志を示し、コムソモールこそが唯一の大衆的青年組織であることを強調した。⁽⁴⁵⁾コムソモール中央は、コムソモール自身が未だ安定的地位を占めることに成功しておらず、成人労働者、労働組合、地方党機関等の側にコムソモールや青年運動一般に対する冷笑的態度が存在することを熟知していた。それ故、世代的対抗を強く打ち出すドゥナエフスキーらの議論が、コムソモールを含む青年組織全般への否定的態度⁽⁴⁶⁾青年組織不要論を強め、かえって青年組織の立場を弱めることにつながることを恐れたものとも考えられる。

ドゥナエフスキーらの議論には一定の賛同もよせられたが、コムソモール中央の強硬姿勢も作用したのか、この部会の投票は、賛成一二、反対三六でセクション創設を否決した。⁽⁴⁷⁾本会議でも、ドゥガチェフとドゥナエフスキーの二つの決議草案に対し、前者の草案に依拠した決議が採択され、さらにセクション創設提案も大差で否決された。⁽⁴⁸⁾第二回コムソモール大会での論戦は、青年労働者の利益擁護の必要性については合意をみたが、その具体的方策をめぐっ

てドゥナエフスキーらの議論は多数を獲得しえず、結局、コムソモール中央委員会の見解が勝利を収めた。一九一九年七月のコムソモール中央委員会総会に次いで、ドゥナエフスキー・グループは敗北する結果に終わった。

しかし、このことは中央委員会の立場や活動全体が同盟員多数から支持を受けていたことを必ずしも意味するものではなかった。大会で行われたライフキンの中央委員会報告に対して、地方の代議員はかなり辛辣な批判を加えた。

その批判の基調は、地方のコムソモール活動が、財政的にも活動家の調達という点でも困難な状況にあるにもかかわらず、中央委員会はなんら具体的な対策を講じず、地方との結びつきをもたず、コムソモールの指導的中心たる役割を演じていないということであった。ウラルの代議員ユロフスカヤ(P. H. Юрковская)は、「中央委員会について知らないし、それからにも受け取らなかった。あらゆる根本的問題はすべて我々自身で解決せざるをえなかった」と述べ、さらにウラジミール県の代議員フェイギン(L. Фейгин)は、「地方が何かをなし遂げ、何かを行ったとき、……中央委員会がそれこれを遂行したように語る。しかし実際は地方が全てを行ったのだ。共産主義青年運動全体はまったく自然発生的なものであり、中央委員会のなんらの指導なしに行われた。中央委員会の側からは紙の上での指導だけであり、全く役にたたない」とより激しい口調で非難した。「我々は中央委員会が存在することすら知らなかった」というザンデルの皮肉を込めた批判に、地方からの代議員の気分は象徴されていたように思われる。⁽⁴⁹⁾

その意味で、労働組合青年部創設を求めるドゥナエフスキーらの主張それ自体には必ずしも賛同しないが、中央委員会に対する批判的気分という点で、地方の活動家の間には一致が見られた。大会最終日に行われた新中央委員会の選出において、ドゥナエフスキーがドゥガチェフより上位の票数の第六位の順位で中央委員に選出されたことは、その一致を背景にしているものと考えられる。そして、ドゥナエフスキーは、中央委員会における経済部局長として、この領域での「専門家」として発言権を確保し続けるのである。⁽⁵¹⁾

(三) 中央委批判の高揚と党中央委の介入

ドゥナエフスキーは、第二回コムソモール大会に提出した決議草案において、彼らの主張の背景をなす青年労働者の現状を次のように描いた。

生産の荒廃は青年に重くのしかかった。工場から街頭へと放り出された青年は、なんら知識がなくても一人で稼げる仕事（配達係、使い走り、行商、小物の売り）に向かい、生産労働をやめてしまった。未成年集団はそうした仕事に就くことで、投機や犯罪に取り込まれざるをえない。⁽⁵²⁾ 青年労働者は街頭で墮落し、『どん底』の人々、売春婦、木賃宿の常客、犯罪者の巢窟の常連を自分で満たしていった……⁽⁵³⁾

青年労働者のみならず、革命ロシア全体が、内戦と戦時共産主義政策によって疲弊していた。食料危機、住宅不足、燃料危機、交通の途絶、伝染病の発生……。一九二〇年に入ると、モスクワでは食料危機を基本原因とするストライキが各工場に頻発しだした。⁽⁵³⁾

深まる危機状況は、ドゥナエフスキーらの現状認識を一層裏付けることになった。しかもドゥナエフスキーは中央委員会を代表して一九二〇年三月の第三回労働組合大会に出席し発言するなど、その発言力を高めていた。⁽⁵⁴⁾ 第二回コムソモール大会での「敗北」は、ドゥナエフスキー・グループの活動にピリオドをうつものではなく、かえって勢いを強めることにつながった。先述したように、ドゥナエフスキーの主張自体に共感するわけではないが、内戦下で活動が極度に困難になっていた地方のコムソモール組織の中から、コムソモール中央委員会の活動や指導の不足分に批判の声が高まりつつあり、こうした中央委批判グループとドゥナエフスキー・グループがコムソモール中央委主流派（シャツキン・ルイフキンら）への反対という点で結合する気配をみせていった。反対派に属したフェイギンは、後に反対派の基盤について、次のように語った。「反対派の基盤は何であるのか？ 第一に労働者大衆の不満

であり、第二に中央委員会構成員の官僚主義化である。⁽⁵⁵⁾

一九二〇年八月の第三回コムソモール中央委総会は、各地方の活動家による中央委への批判の大合唱の場となった。二つのグループが結びつき、コムソモール内部に反対派が結成されつつあった。この動きに加わっていたショールヒン (A. Шохин) は、後にこの反対派グループについて若干の情報を残した。彼らは「単一の政綱で団結していたわけではなかった」し、「労働組合青年部や労働者青年ソヴェトに関してはドゥナエフスキーの見解を全く否定していた同志も入っていた」が、数的規模としてはかなりのもので、コムソモールの大組織および一連の工業組織が加わっていた。⁽⁵⁶⁾

対立が激化する中で、追い詰められたコムソモール中央委のシャツキンらは党中央委に事態收拾のための介入を要請するという行動に出、これが事態をさらに悪化させた。ドゥナエフスキーらはこの要請に激しい反発をみせ、厳しく中央委員会を非難する手紙を地方のコムソモール活動家に送り、反対派の組織化を進めた。「中央委員会は、自身自身を全体として党の管轄下に引き渡し、従って、青年運動の代表機関は廃止されてしまった。我々は党中央への要請の事実を、党および国全体を前にして威信の失墜を露にしたものと考える。」さらに反対派のポリフェム (Поліфем) は、「この問題に関して党に要請したのは、悪い先例であり、今後自立性の廃絶を招来する」と述べて、ドゥナエフスキーに同調した。⁽⁵⁸⁾

ここにきて、ドゥナエフスキーらの議論は、コムソモールと党の関係の問題に発展した。それ以前、彼らには、この点で注目すべき発言はなかった。彼らの主張は、基本的に青年労働者の利益をいかに確保するかということに集中していた。しかし、自分の利益は自分で守るという自己救済の姿勢を示して、そのための自己組織を求めている彼らにとって、党の指導や介入が自身の青年組織論を實踐するための障害となることに思い到ったのである。ショールヒンは、反対派が単一の政綱をもたなかったとしつつも、「国内生活の全政治問題に関する、コムソモールの自由で自立した見解の表明」とか、党中央委への組織的従属の否認という点では一致していたことを回想している。⁽⁵⁹⁾ コムソモ

ル中央委も、もちろん党への従属を志向していたわけではないが、中央委と反対派の対立の焦点には、コムソモールの組織的自立の問題が深く関係していたのであった。一〇月に予定されるコムソモール第三回大会へ向けて、中央委と反対派の多数派工作が熾烈に展開され、大会直前までいずれが多数を占めるのか予想がつかない状態であった。⁽⁶⁰⁾

かかる事態に党の介入が開始された。九月二日、一〇日、二七日の党中央委組織局会議で、ドゥナエフスキーらコムソモール内反対派の問題が討議され、まず二日の会議で、ドゥナエフスキーら三名の党からの除名（半年間）が決定された。⁽⁶¹⁾ さらに一〇日の会議では党の全県・郡委員会へ向けた回状が採択され、それは九月一八日付の『党中央委員会通報』に掲載された。その回状は、まず青年組織のあるべき役割（党の補助組織、共産主義の学校など）について触れた後、ドゥナエフスキーらが「労働者青年運動の形態」といった問題設定によって、青年を「間違った方向」へと導こうとしたこと、もしそれが実行されたならば、青年運動にとっても、「我が青年が参加する労働者組織にとっても」、「著しい損害」になったであろうことを批判していた。回状は、ドゥナエフスキーらが、「若いプロレタリアを成人プロレタリアに対抗させて階級闘争の原理を歪曲し」、労働組合運動を阻害することにつながる労働組合青年部創設を試みたと記し、それを「青年サンジカリズム」と位置づけた。加えて、彼らは中央委内に「秘密の分派組織」を作って中央委多数派にむけた組織闘争を行い、結果的に「同盟内の危機」をもたらしたと断罪された。故に党中央委は、ドゥナエフスキーらを青年の間での活動から引き離す決定を行ったのだが、ドゥナエフスキーらはそれに従わず、「党中央委に対する非党コムソモールの闘争計画」を地方のコムソモール活動家に呼びかけ、そのため党中央委は彼らを党から除名した、と説明された。最後に回状は、党の県委員会に対し、「青年運動の健全なる共産主義分子」に支持を与えるよう指令し、ドゥナエフスキーらが進めている地方における多数派工作を阻止するよう命じていた。⁽⁶²⁾

しかし、ドゥナエフスキーらは大会直前まで代議員獲得工作を続け、各地から代議員がモスクワに集まってくるとその宿舎で説得を行った。トゥルシチェンコによれば、代議員の立場は三つに分かれていたという。①中央委多数派

を支持するグループ（ペトログラード組織、モスクワの代議員の一部、ウラジミール、ペンザ県等）、②ドゥナエフスキー派（モスクワの一部、ニジェゴロド、サラトフ、オルロフ等）、③中央委には不満があるがドゥナエフスキーの立場には批判的グループ。いずれのグループも、多数派を形成していなかった。⁽⁶³⁾

一方、九月二九日に党中央委総会がレーニン出席の下で開催され、そこでコムソモール第三回大会の問題が討議された。総会は、アンドレーエフ（А. А. Андреев）、ブハーリン（Н. И. Бухарин）、プレオブラジエンスキー（Е. А. Преображенский）にコムソモール大会の全活動をとり行い、必要であれば党フラクションを創設するよう委任した。⁽⁶⁴⁾

フラクション会議が招集されることを大会前日に知ったドゥナエフスキーらは、大会代議員会議を招集し、意志統一を企図した。この会議には、中央委多数派の中核であるペトログラードの代議員は招かれず、スモレンスク、ヤロスラヴリ、ペンザ、ウラジミール等の代議員は参加しなかった。ここで、コムソモール中央委への態度、中央委内の紛争、という二つの問題が討議された。前者については、「中央委の活動が不十分との認識」で一致したが、後者についてはドゥナエフスキーの「反党的行動」に議論が集中し、党フラクション会議の対策が準備されないままに終わった。⁽⁶⁵⁾

そして、フラクション会議が大会開催直前に開かれた。この会議では、ルイフキンの発言が議場の雰囲気を作り上げ、それをペトログラードの代議員が一体となって後押しした。ルイフキンは、ドゥナエフスキー・グループのアクチヴ・メンバーが地方の活動家と交わした往復書簡を資料として提出した。そして、その書簡のなかで、いかに中央委活動家への中傷的描写が行われているかを示し、ドゥナエフスキーらを、同盟を分裂させる無責任なグループとして特徴づけたのである。ペトログラードの代議員は、書簡の引用によって補強されたルイフキンによる反対派非難がなされるたびに、「恥しらず、スキャンダルだ！」と叫んで応援し、ルイフキンが聴衆を全面的に掌握するのを助けたという。そしてその後のドゥナエフスキー・グループの演説は、作り出された反対派のイメージを払いのけることができなかった。⁽⁶⁶⁾ 会議は、圧倒的多数で、党中央委のドゥナエフスキーらへの処分を支持し、反対派の敗北に終わった。

この会議では、その他、大会幹部会の構成員も選出されたが、そこでも反対派は数的に劣勢を余儀なくされ、大会運営の主導権を中央委多数派に握られた。大会開催前に、勝負は決した。

- (1) КПСС о комсомоле и молодежи. Сборник резолюций, решений съездов, конференций партии, постановлений ЦК КПСС и других партийных документов (1917-1961 гг.). М., 1962, стр. 4-5.
- (2) Восьмой съезд РКП/6/. март 1919 г., протоколы. М., 1959, стр. 301.
- (3) Там же, стр. 302.
- (4) Там же, стр. 301.
- (5) 決議は、КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК. т. 2, 1983, стр. 115. またこの点につき、やはりコムソモール指導者のルイフキンは、第二回コムソモール大会（一九一九年一〇月）の中央委員会報告の中間で活動を行う使命を有した自立した組織であることを、党が認識するよう強いらねばならなかった。……第八回党大会において、党の我が同盟に対する関係について、我々によって提起された決議が採択された。……それは我が同盟に対する党の見地を明確化した。中央委員会の疑いのない功績はここにあり。」（Второй всероссийский съезд РКСМ. Стенографический отчет. 5-8 октября 1919 г., М.—Л., 1924, стр. 40.)
- (6) Трущенко, Источник сил, стр. 183.
- (7) Там же, стр. 183-184.
- (8) Второй всероссийский съезд, стр. 200.
- (9) Трущенко, Источник сил, стр. 184.
- (10) 党中央の承認は八月六日であった。この遅れについて、ルイフキンは、第二回コムソモール大会（一九一九年一〇月）の場で、党中央委が業務過剰で承認が長引いたと述べている（Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 40）が、ここにも党中央のコムソモールに対する関心の低さが現れているのかもしれない。
- (11) КПСС о комсомоле и молодежи, стр. 7-8.

- (12) Трущенко, Партия и комсомол, стр. 142.
- (13) КПСС в резолюциях и решениях ... , т. 2, стр. 202.
- (14) Девятый съезд РКП/б/ , стр. 349, 351.
- (15) プレオブラジエンスキーは、第九回党協議会で青年の間でのアジテーションの意義について言及した際、「多くの地方の同志達は、この活動の重要性を理解していない」とのべ、地方・下部活動家の青年組織への軽視した態度の存在を示唆した（Девятая конференция РКП/б/ . сентябрь 1920 г., протокол. М., 1972, стр. 127）。
- (16) 内戦と戦時共産主義期に形成されたボリシェヴィキの軍隊的政治文化について Robert C. Tucker, "Stalinism as Revolution from Above," Tucker ed., *Stalinism: Essays in Historical Interpretation*, Norton, 1977, pp.91-93 を参照。
- (17) Девятая конференция РКП/б/ , стр. 89.
- (18) 例えば、第二回コムソモール大会の中央委報告への討議を参照（Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 57-70）。
- (19) これは、一九一九年二月一五日のコムソモール中央委総会で決定された（Там же, стр. 186）⁶ 及び「Первоградская правда», 23 декабря 1919 г., стр. 4 も参照⁷。
- (20) Девятая конференция РКП/б/ , стр. 89.
- (21)コムソモール創設直前に開催された北部州労農青年同盟協議会（一九一八年一月二〇日～二二日）の決議では、「青年の組織化の試みやすでに存在する青年細胞に対する地方党组织の無関心でしばしば悪意ある態度」が批判されていた（Ленинское поколение, стр. 134 及び「Первый всероссийский съезд РКСМ, стр. 18」）⁸。コムソモールの大会でも、地方・下部活動家に対する不満が述べられていた（Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 61, 72）。また一九一九年二月二三日～二四日のスモレンスク県党委員会総会で、「コムソモールを代表して発言したツェイトリンは、コムソモール組織が現地の党委員会から全くなんの協力も受けていないこと、逆に、コムソモールから活動家を引き離すといった妨害がある」との不満を述べた（M.Fainsod, *Smolensk under Soviet Rule*, Unwin Hyman, 1989 [first published 1958], p.409）⁹。
- (22) Л. Шапкин. Основные вопросы юношеского движения. М.—Л., 1925, стр. 59.
- (23) КПСС о комсомоле и молодежи, стр. 11.
- (24) 一九二〇年九月に開かれた第九回党協議会において、クレスチンスキーは、青年の間での活動は、党ではなくコムソモールの管轄であることを再確認したうえで、しかしこの活動は、「党が非常に大きな注意を寄せねばならない重要な共産主

「青年同盟があらゆるその活動において、放っておかれた」ことに求めていた(Девятая конференция РКП/6/ стр. 89-90)。クルスチンスキー発言に対し、ルイフキンは、それを、党が青年の間での活動に注意を向け始めた事としめすものとして歓迎した(Там же, стр. 117)。

- (25) ドゥナエフスキーの経歴については、Трущенко, Партия и комсомол, стр. 177。
またシャツキンは、第三回コムソモール大会において、ドゥナエフスキーを労働問題の「専門家」と呼んだ(Третий всероссийский съезд РКСМ. Стенографический отчет. 2-10 октября 1920 г., М.-Д., 1926, стр. 171)。また、第三回労働組合大会(一九二〇年四月)にドゥナエフスキーが出席し、コムソモールを代表して祝辞を述べ、さらに青年労働者の職業教育の問題で発言している(Съезд профессиональных союзов СССР, 3, Москва, 1920. Стенографический отчет. 6-13 апреля 1920 года. Часть 1-ая (плenums), М., 1921, стр. 16, 125)。

- (26) 《Правда》, 18 апреля 1919 г., стр. 1-2。
(27) Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 183。
(28) Там же, стр. 200。
(29) 《Юный коммунист》, No. 5, 1919 г., стр. 4-5。
(30) 二つの論文は「われわれ」 Шапкин, Указ. соч., стр. 186-193 に収録されている。
(31) Там же, стр. 190。
(32) Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 201。
(33) 後述する第二回コムソモール大会での議論を参照。また、六時間労働制が侵害されていることについては、《Петроградская правда》, 6 января 1920 г., стр. 2 も参照。
(34) Трущенко, Партия и комсомол, стр. 125。
(35) 内戦の激化ゆえに、この大会は綱領や規約の改正という議事を残して打ち切られた他、コムソモール員を南方戦線に動員するものが決定された(Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 126-127)。

(36) Там же, стр. 27-29。

(37) Там же, стр. 27, 28。

(38) Там же, стр. 29-30。

- (39) Там же, стр. 30-31.
- (40) Там же, стр. 137-139.
- (41) Там же, стр. 142-145.
- (42) 以上、ドゥナエフスキーとザンデルの発言は、 Там же, стр. 146-150.
- (43) Там же, стр. 114-115.
- (44) Там же, стр. 113.
- (45) Там же, стр. 152-153.
- (46) ルイフキンは、第九回党協議会において、ドゥナエフスキー問題を念頭におきながら、現在「同盟廃止の問題、同盟を党の部局に変えようとの問題が提起されている」と危機感を表明した上で、それが「間違った手段である」と批判した。しかし、一方で、第三回大会の後には、「同盟に規律を復活させねばならない」と述べて、ドゥナエフスキーの問題の解決を約した（Девятая конференция РКП/6/, стр. 119）。
- (47) Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 153.
- (48) Там же, стр. 114, 115.
- (49) 以上、中央委員会への批判は、 Там же, стр. 56-70.
- (50) Там же, стр. 123.
- (51) Tirado, *op. cit.*, p. 160; Третий всероссийский съезд РКСМ, стр. 171.
- (52) Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 112.
- (53) Chase, *op. cit.*, pp. 11-57; R. Sakwa, *Soviet Communists in Power: A Study of Moscow during the Civil War, 1918-21*, Macmillan, 1988, p. 95.
- (54) 注(53)を参照。
- (55) Третий всероссийский съезд РКСМ, стр. 119.
- (56) Трущенко, Партия и комсомол, стр. 135-136.
- (57) Шохин, Указ. соч., стр. 92.
- (58) Трущенко, Партия и комсомол, стр. 138.
- (59) Шохин, Указ. соч., стр. 92.

- (60) Грущенко, Партия и комсомол, стр. 158.
- (61) Там же, стр. 150.
- (62) 《Известия ЦК РКП/б/》, No. 22, 1920 г., стр. 23.
- (63) Грущенко, Партия и комсомол, стр. 157-158.
- (64) 《Вопросы истории КПСС》, No. 11, 1965 г., стр. 142.
- (65) Грущенко, Партия и комсомол, стр. 158.
- (66) Там же, стр. 159.

四 ソヴェト国家下のコムソモールの位置・役割の確定

一九二〇年一〇月二日夜、シャツキンは、第三回コムソモール大会の開会を宣言した。激烈な内部闘争と党の介入を経た末、ようやく開催にこぎつけたのである。先のフラクション会議において、代議員多数のドゥナエフスキーらに対する除名処置への賛同を取りつけ、すでにドゥナエフスキーらとコムソモール中央委への批判派を分離するのに成功していたため、大会でドゥナエフスキーを公然と支持する議論が表面化することはほとんどなかった。しかし、地方との結びつきが弱く、十分な指導性を発揮しえなかった中央委の活動への不満は根強く、大会の場でルイフキンの中央委報告に対して多くの代議員が批判を加えた。そのため、中央委報告に関する決議でも中央委の活動を批判する文言が盛り込まれた。⁽¹⁾

しかし、ここで最も注目すべき事は、異なる青年運動・青年組織のありかたを模索したドゥナエフスキーらの排除を契機にして、この大会で同盟新綱領が採択されたことである。それは、ようやくその終結をみた内戦の渦中から姿を現してきた新しいソヴェト国家の中で、青年運動のあり方や青年組織の占めるべき位置と役割が確定されたことを

意味していた。そして、大会開会直後に、ソヴェト国家の最高指導者レーニンが登場して「青年同盟の任務」と題する演説を行い、以後の青年組織の役割を画定する上で重要な問題提起をなしたのは、ひとつの象徴的行為と見ることもできる。

レーニンの大会出席と演説をめぐっては、大会会場で演説を聞いた代議員各種の回想が残されている。⁽²⁾ なかでも、レーニン出席までのその内幕に言及したシャツキンの回想は興味深いものである。シャツキンは青年同盟内の激しい論争の渦中に、コムソモール中央委の全権を受けてレーニンと会見し、彼に同盟の危機状況を報告して意見を求めるとともに、大会への出席と現在の情勢に関する報告を依頼したのであった。しかしレーニンは、同盟内の論争については、「すでに組織局が検討し解決している」と返答し、何らの見解をも表明しなかったといわれる。一方、大会での報告についてはそれを了承し、約束どおり当日夜八時に大会会場に現れた。ところがシャツキンがレーニンに現在の情勢についての報告を求めると、彼はそれを拒否した。

——いや、現在の情勢について私は報告しないだろう。

イリイチは予想に反して応えた。

——それはどうして。

——もううんざりしている。私は青年同盟の任務について話すか、あるいはなににも話さないかだ。

——しかし、あなたにはなんの準備もないでしょう？

——心配するな。

イリイチはポケットから入念にメモされた大部の紙の束を取り出した……。⁽³⁾

レーニンの演説は、それまでの大会に出席した指導者のそれとは大きく異なるものであった。たとえば、「ヨーロッ

パやアメリカで革命がおこるのが、明日か、一箇月後か、一年後か正確に述べることはできない。しかしそれが近づいていることを我々は知っている。この時まで我々は労働者階級の前衛を前面に押し立てて。我が青年はこの前衛の前衛である」と演説したトロツキーのように世界革命の接近を唱え、白軍や外国の干渉との青年の勇ましい戦いを賞揚し、青年を持ち上げるような響きは、レーニンの演説にはなかった。演説の基調は、地味で、控え目なものであった。

レーニンは、「青年共産同盟の基本的任務はどういうものか、またそれに関連して、一般に社会主義共和国の青年組織はどういうものであるべきか」について述べると話を切り出した。敷衍すれば、ソヴェト国家の下でのコムソールの位置と役割の問題を論ずるものであると言える。彼は、青年こそ共産主義社会をつくりだす真の任務をになっていると述べたうえで、青年同盟の「任務とは、学ぶ、ということである」と語った。「学ぶ」とりわけ「共産主義を学ぶ」ということに関してレーニンは持論を展開するわけだが、その際彼は、何か目新しい事柄を学ぶということではなく、また「共産主義のスローガン」を学ぶということでもなく、もっぱらこれまでの「古い社会がわれわれにのこした知識」を学ぶことを説いていた。「人類がつくりだしたすべての豊富な知識で記憶をゆたかにするときにはじめて、共産主義者となれるのである」。ここには晩年のレーニンの思想の一端、すなわち「後進国」ロシアの文化的「遅れ」を痛感し、さしあたり「真のブルジョア文化で十分であろう」としたレーニンの思考が表現されていると言える。

この議論にたつて、彼は、さらに「青年同盟の任務は、これらの「共産主義者の」青年が学び、みずからを組織し、結束し、闘争しながら、彼ら自身と彼らを指導者と目しているすべての人々を育てあげていくように、またこれらの青年が共産主義者を育てあげるように、同盟の実践活動を組織することである」と述べて、コムソールの教育機関としての位置と役割を提示した。⁽⁶⁾要するに、ソヴェト国家の下で育つ青年にたいする政治的社会的な機関として、あるいはイデオロギー装置として、コムソールを位置づけていると結論づけうるだろう。この「学ぶ」ための組織

としてのコムソモール、言い換えれば「共産主義の学校」としてのコムソモールという議論は、コムソモールに関する党の決議などにも散見されたものであったし、シャツキンが以前から論じていたことでもある。しかし、こうしたコムソモールの位置づけが、レーニンの演説によって権威づけられたと言うことはできる。レーニンをコムソモール大会の場に引き出したことは、コムソモール指導部にとって大きな意義を持つものだったのである。そして、この基調に沿って、コムソモール新綱領も策定されるのであった。⁽⁷⁾

同盟綱領に関する報告は、シャツキンによって行われた。報告に先立ち、シャツキンは綱領草案作成過程をあきらかにしたが、ドゥナエフスキー、ブハーリン、シャツキンの三人がその作業に参加したという。当初、中央委の綱領草案とは別にドゥナエフスキーの草案も提出されていたが、シャツキンは、両者に「原則的不一致がないことが確認された」ので、ドゥナエフスキーは報告を放棄し、「双方の良い部分を全て結びつけた一つの草案を提出する」ことになったと述べた。⁽⁸⁾すでに言及したように、ドゥナエフスキーの綱領草案は党と同盟の関係について同盟の自立性をより強調していたのであるから、完全な一致は考えられないのだが、ドゥナエフスキーが抵抗を断念したか、もしくはそうさせられたのだろう。

第一回大会に続き綱領報告を担当したシャツキンの議論の中に、その間の議論の変容、すなわちソヴェト国家における青年組織の位置と役割という観念の成熟がうかがえる。シャツキンは、第一回大会で採択された綱領は「同盟がまだ弱かった時期につくられたもの」であり、その時と全く違った状態にある現在、「プロレタリア独裁のその他の機関と青年組織の相互関係を……確定しうる」と述べたのであった。そして、第一回大会では、綱領の性格が「共産主義的」綱領として提起されていたが、ここでは、「我々の政治綱領は、共産党の綱領だ」と強調され、よりストレートに共産党との結びつきを表明した。それに続いて、彼は社会主義国家と資本主義国家の下での青年労働者のありかたの違いを強調し、次に青年組織の必要性へと議論を転回した後、レーニンの議論を踏まえながら、青年同盟の基本的

任務として「青年の共産主義的教育」を提示した。⁽⁹⁾

今回の彼の報告でことさらに興味深い点は、前回の報告にはほとんど無かった「同盟と党」の相互関係、及び「同盟と国家」の相互関係の問題に関するシャツキンの見解が存分に展開され、その間の状況の変化とシャツキン自身の理論的發展がうかがわれたことである。まず「同盟と党」の項目では、シャツキンは、「共産党との相互関係の問題について、我が同盟内にも非常に多くの論争があったし、同盟と党の間にも論争があった」と述べて、この問題が幾多の論議を経てきた複雑なテーマであることをまず前提に据えた。そして次に、この相互関係を理解するためには、「この関係が、党や我が大会の様々な決議や同盟中央委と党中央委によって取り決められた種々の指令によって確立されたといった考えを全て投げ捨てる必要がある。この相互関係の基礎は、我々がこう考えているよりも遥かに深部に潜んでいる」と注目すべき発言をおこなった。相互関係の問題は、一片の指令文書などで片づく問題ではないということが率直に述べられたのである。

シャツキンはこの点をさらに敷衍して論じた。同盟には二面的な組織的性格があり、一面は「教育組織」としての性格であり、もう一面はソヴェト共和国の全生活へ実践的に参加する「戦う組織」としての性格である。教育組織として青年を共産主義的に教育するために、同盟には多くの自主活動を必要とするが、一方戦う組織として、同盟は「党の指導の下で戦う全共産主義勢力の全面的に中央集権化されたシステムの中にはいられない」のである。つまり戦う組織として、コムソモールは「共産党の指導の下で必ず活動しなければならない」のであった。そこで問題が発生する。すなわち「自立性」と「党への従属」、言い換えれば「自立性と労働者運動の集権化」の矛盾である。シャツキンはこれをまさに率直に、「これは最後まで片づけられないイデオロギー的矛盾である」と語り、それゆえ、党と同盟の相互関係は、「いかなる決議をもってしても最終的結果としては確定しえないものと位置づけたのである。党と同盟の関係を「イデオロギー的矛盾」関係として把握する大胆な議論であるといえる。

しかしさらに注目されるのは、その矛盾を前提にしたうえで、同盟と党の相互関係をいかに考え、どう解決していくのかという問題に関する彼の論理展開である。彼は、相互関係が三つの条件によって確定されるものとした。①共産党の状態、②青年同盟の状態、③客観条件つまり同盟と党が活動するところの政治状況、の三点である。先ず①について、シャツキンは、ドイツの状況との比較によって論じた。ドイツでは共産党がまだ弱く決定的な戦術も持っていないから、そこでは青年組織は党が本来実行しなければならないような若干の任務を自分で引き受けなければならぬ。それ故、党の戦術や綱領の承認について青年は事前に取り決めることはできない。一方ロシアでは、共産党が強固で、綱領や日常闘争の戦術も完全に信頼にたるものであるから、青年同盟は政治的機能を自分でもつ必要はないし、自立した政策も持つべきではない、というのである。ここにはロシア共産党への政治的従属が前提にされているとも言えるが、しかし、共産党の状態によっては同盟の立場も変わりうるとの論理的可能性は残されていると読むこともできる。ちなみに、シャツキンは、二〇年代半ばに刊行された彼の論文集の序文で、党と同盟の関係について言及し、「党と同盟の具体的な相互関係は……第一に党の政策の正当性に依存する」と語った。⁽¹⁰⁾ ここにも「政策の正当性」という一定の状況依存的論理が垣間見えるのではなからうか。

次に②について、シャツキンは「もし同盟が強固で、そこを規律が支配しており、そこで多くの政治的活動が行われているのであれば、同盟は党に自身を重要視させうる。そしてまたこのことは同盟と党の相互関係に大きく影響するのだ」と論じて青年同盟の組織的力という状況に相互関係を規定させた。さらに③についても、現在のような「過酷な緊張した闘争の時期」ではなく、それほど緊張を必要としない「平和建設に漸次移行する」ような時期になれば、「その時青年はより自立的になるだろう。なぜなら、かかる緊張した集権化やかかる全組織の共産党への従属が必要ではなくなるような客観条件が到来するからである」と述べたのであった。⁽¹¹⁾

こうしたシャツキンの議論は、矛盾を一義的に解決するのではなく、矛盾を矛盾として把握し、いろいろな状況と

関連させながら、「同盟と党」の相互関係をいわば弁証法的に解決していく、よりダイナミックな論理構造を有していたと評価しうるのではなからうか。もちろん、シャツキンにおいても、「労働者階級の勝利は、そのあらゆる力が共産党の指導下の唯一のシステムのなかに組織される時のみ可能なのは明白だ⁽¹²⁾」とされる以上、共産党の同盟に対する組織的指導（および共産党を中心とした国家秩序）は前提にされざるをえず、それ故ドゥナエフスキーらの議論に比せば、同盟の組織的自立性の主張は強硬ではない。とはいえ、シャツキンの議論には一定の柔軟性が感じられるのである。⁽¹³⁾

続く「同盟と国家」という問題設定において、シャツキンは、同盟が事実上国家機能を担い、国家装置との融合現象がみられることを指摘した上で、「プロレタリア国家との相互関係の基礎を明確に確定する必要がある」と述べた。そして彼は、「青年の生活と労働に係わる全問題の解決はプロレタリア国家に帰属する」のであり、「青年自身によって解決されると要求すべきではない」と論じてドゥナエフスキーらの見解を否定した。青年同盟のこの領域での任務は、プロレタリア国家が行う措置の実行に青年の関心をひきつけ、一定のイニシアティヴを発揮し、国家機関をうながす、そうした任務にとどまるべきであって、「国家機関にとってかわるべきではない」。要するに、「同盟は……あらゆる国家活動から解放されなければならない」のであった。このように述べてシャツキンは、各プロレタリア装置の機能分業関係を明確化することが、現状において必要不可欠であることを指摘したのである。⁽¹⁴⁾

シャツキンの報告全体に対して若干の批判が加えられたが、大筋としてシャツキン報告の線で新綱領が採択された。綱領では、「ロシア・ソヴェト共和国の国家権力が労働者階級の手にある」ことが前提とされ、青年運動が「全プロレタリア共産主義運動の一部」であることが明記され、それ故、青年同盟が、「プロレタリア革命とソヴェト共和国の指導者」たる共産党の綱領・戦術を承認すること、党の政治指令に従うこと、党の統制下で活動すること、加えて同盟中央委が党中央委の直接的従属下にあること、しかし「自治組織」であることなどが明記されていた。一方、青年の

労働と教育の問題の解決、すなわち青年労働者の利益擁護は、「全労働者階級とそのプロレタリア国家の任務である」とされ、故に、青年の生活・労働などの改善のための活動を、同盟は「労働組合機関や人民委員部の機関を通じて実践する」こととされた。⁽¹⁵⁾

以上みてきたように、コムソモール第三回大会は、開催までの同盟内対立をかりうじて収束させるとともに、新綱領を採択することで、ロシアにおける青年運動・青年組織のあり方を確定した。その意味は、これまで述べてきたことから明らかなように、青年運動が、個別青年の利害にのみ基づくものではなく、「全プロレタリア共産主義運動」の一翼をになうものでもあること、そして青年組織が、共産党を中核とする新しいソヴェト国家の中に一定の地位を占める大衆団体（後には社会団体との明示的規定が与えられる）であると位置づけられたということであった。第一回コムソモール大会以降進められてきた青年運動・組織の位置と役割の確定は、ここによりやくその完成をみたと言える。それは、一方で、別の形で青年運動・青年組織のあり方の模索を排除するものであったが、他方、青年運動・青年組織の独自の意義を認めない見解を否定することによって初めて成立するものでもあった。

- (1) Третий всероссийский съезд РКСМ, стр. 278-279.
- (2) 例えは、ごく最近のものとしては、会場ロビーから演壇へとレーニンを導いた人物の回想がある（《Комсомолецкая правда》, 21 октября, 1988 г., стр. 2）。
- (3) Вечно живое. Воспоминания современников о В. И. Ленине. М., 1965, стр. 199-200.
- (4) Второй всероссийский съезд РКСМ, стр. 12.
- (5) 『レーニン全集』第三三卷、大月書店、一九五九年、五〇八頁。
- (6) 以上、大会でのレーニン演説は、『レーニン全集』第三一巻、二七九―二九七頁。
- (7) なお、レーニンは演説後代議員との質疑応答を行った。従来この部分の議事録は発見されておらず、一九二六年版の第三回コムソモール大会議事録には収録されていない。しかし、最近『コムソモリスカヤ・プラウダ』にこの部分が発表さ

れた。代議員が党とコムソモールの相互関係について質問したことへのレーニンの回答が注目されたが、レーニンは、「共産主義青年の同盟は、共産党の一般指令に従わねばならない」と述べたにとどまった（《Комсомольская правда》、2 октября, 1988 г., стр.2）。

- (8) Третий всероссийский съезд РКСМ, стр. 186.
- (9) Там же, стр. 187-192.
- (10) Шапкин, Указ. соч., стр. 14.
- (11) 以上「同盟と党」にひびきは、Третий всероссийский съезд РКСМ, стр. 193-195.
- (12) Там же, стр. 193-194.
- (13) シャツキンの議論の相対的柔軟性は、後に、スターリン体制の形成の開始に並行したイデオロギー的教条化の過程で問題とされ、批判されることになる。これについては、拙稿「コムソモールの自己批判カンパニヤをめぐる」『政治研究』（九州大学政治研究室）第三四号、一九八七年、を参照して欲しい。
- (14) Третий всероссийский съезд РКСМ, стр. 195-197.
- (15) Там же, стр. 306-314

おわりに

二月革命以後、青年組織が提示した目標は、すでに述べてきたように、二つの方向性を有していた。第一は、青年の個別利害の主張に向かうものであり、第二は、「個別」の枠を越えた、より普遍的な性格を持つ眼前の歴史過程（革命行動）への参加に向かうものである。両者は、必ずしも相いれないものではなく、いずれも青年の自己実現の要求として交錯していた。そして、双方の目標を実現させうる基礎条件として、自らの組織化が必要であった。すなわち、組織を作り、持つこと、それ自体が、欠かすことのできない要求であった。一方で、個別利害を主張し圧力をかける回路として、他方で、ソヴェトや労働組合などの成人の組織とは異なる自分たちの政治活動の場として、組織が必要

とされた。

青年運動のこの両面は、コムソモールの中にも流れ込んだ。共産主義をめざす組織として、共産主義教育の担い手たる役割に比重がかけられてはいたが、個別利益の主張は、青年組織の役割として想定されていた。コムソモールの中でも、この両者が交錯しており、時代状況とともにその比重は揺れ動いた。

ドゥナエフスキーらは、青年労働者の個別利害をより直接的に訴えた。彼自身共産党員ではあったが、当時、ある意味で弱者であった青年労働者を救済することに真面目に取り組む姿勢を見せていた。それが、青年組織本来の役割であると考えられたのであろう。しかし、一方で、青年層の個別利害の存在を承認しない部分もまた存在した。成人労働者や工場委員会（労働組合）等は、労働者階級の団結を崩すとの理由で、そうした立場にたつ傾向があった。地方や下部党組織の活動家も同様に、青年組織の必要性自体に否定的態度を示しがちであった。

両極的態度の間で、シャツキンらコムソモール指導部は、コムソモール組織それ自体の確保をまず第一の課題に設定し、共産党中央——普遍的課題への動員装置として把握しがちではあったが、青年組織の必要性を否定しなかった——から制度的承認を受けることに力を注いだ。党・コムソモール関係を制度化することで、コムソモールという青年組織の存在確保を模索していたコムソモール指導部にとって、青年運動・青年組織一般の存在意義を否定する立場からであれ、あるいは、青年の個別利害を強く主張してコムソモール以外に大衆的青年組織を創設しようと企てる立場からであれ、コムソモールの存在理由を失わせしめる議論は、受け入れられるものではなかった。これは、ある意味で、コムソモールなる官僚組織の利害表明の端緒とも言える。

しかし、コムソモール内部の論争が高揚する中で、論争を自身で解決できず共産党中央の介入を招いたことは、コムソモール中央の指導性欠如を意味するものであった。この介入（フラクション創設、ドゥナエフスキーの除名など）は、例外措置であると当時は意識されていたとはいえ、コムソモールの「自立性」という綱領上の文言を、現実

には狭く機能させる結果を招来し、党の統制強化につながった。この結果、コムソモールが有していた二つの機能——青年の個別利害を主張することと、より一般的・普遍的課題に青年を動員すること——のバランスが後者より設定されることにつながった。シャツキンは、第三回コムソモール大会の綱領報告において、コムソモールの組織的必要性を強調したが、その理由を、コムソモールの共産主義的教育の役割に求め、青年の利益擁護と関連させなかった。コムソモール創設大会におけるシャツキンの綱領報告では、彼は、利益擁護の役割をはたすためにも青年組織が必要であると語っていたのである。この立場の変化は、ドゥナエフスキー事件の後遺症であるし、シャツキン自身が個別利害の主張よりも、共産主義建設なる理念により鼓舞されていたことを示すものかもしれない。

もっとも、第三回大会で採択された正式の綱領文書には、青年の利益擁護の項目が明記されており、コムソモールの果たすべき役割と位置づけられていた。実際に、ネップへの移行という大状況の変化とともに、大衆の利益擁護の必要性が前面に登場するに従い、コムソモールの活動重点もそこに移行していった。ネップの路線が採択された後に開催された第四回コムソモール大会（一九二一年九月）は、議論の多くを青年労働者の利益擁護活動の問題にあてていたし、この大会で再度改められた綱領では、利益擁護の項目の順位が繰り上げられた⁽¹⁾。しかし、この変化は、コムソモールの活動重点の変化と読むべきであり、共産党や国家機関や労働組合などとの関係を示すコムソモールの組織的地位は変わらず、基本的に第三回コムソモール大会で確定されたものを踏襲していた⁽²⁾。

革命、そして内戦を経る中から、新しい国家が生まれてきた。共産党をその指導的の中核とし、国家装置としてのソヴェト、大衆団体としての労働組合、そしてコムソモール等の機能分業に基づく体系的秩序が形成された。本論で述べてきたように、これは予め想定されていた秩序では必ずしもなかった。内戦や軍事干渉といった状況、そしてそのなかでの各政治主体の営みの結果として新しいソヴェト国家が生まれたのである。

コムソモールは、この新しく登場したソヴェト国家の中に一定の位置を占めた。それは共産党によるコムソモール

への統制の強化であった。コムソモールは青年の大衆団体として位置づけられ、青年の政治的社會化を實踐するイデオロギー装置としての役割を、さらに国家的政策課題への動員装置としての役割を与えられた。そのことは、コムソモールが、新国家の下に青年を統合し、動員する一機構として組み入れられたことを意味した。しかし、他方、コムソモールは新国家の下で一定の地位を獲得したとも言える。青年自身の組織として、青年の利益を集約・表出する装置として、さらには革命事業（国家目標と一致する場合もある）へと積極的に参加することを可能にする組織的担保として、コムソモールは、その存在を確保したのである。

本稿は、このコムソモールの位置と役割の両義性が確定されるプロセスを跡づける作業を試みたのだが、ここで獲得された認識は、ネップ期から「上からの革命」、そしてスターリン時代といった一九二〇年代～三〇年代ソヴェト史を、コムソモールを通じて分析する際の一つの枠組みとして、一定の参考になるだろう。その時代のコムソモールの動向は、コムソモールの組織的性格に内在するその二重性を通じて理解されるのではなからうか。もっとも、未だ思いつきの域をでないものではあるが、その意味で、本稿は、コムソモール研究の序論的位置を占めるものでもある。

(1) 大会では、中央委員会報告やその討議で、コムソモールの経済活動、すなわち青年労働者の利益擁護に関する活動の問題が一つの焦点となり、その他にも、「青年労働者の労働、生活、教育」に係わる各種の報告や討議がおこなわれ、一連の決議が採択された。例えば、ドゥナエフスキーによる「青年労働者の社会主義的教育について」、ストゥルミリンによる「青年労働者の状態について」等の報告が行われ、「未成年労働保護について」、「青年労働者の生活の改善について」等の決議も採択された。改正綱領は、*Товарищ комсомолец, стр. 58-70*にある。

(2) 中央委員会報告を行ったツェイトリンは、ネップの導入とともに生じた、未成年労働者の定員削減（失業のこと）や賃率問題について発言し、「中央委員会は、労働組合を通じて、さらに定員削減を規制するソヴェト機関を通じて、あらゆる措置を講じた」と述べ、青年の利益擁護の問題が、まずは労働組合や国家機関の任務であることを示唆した（*IV созыв*

РКСМ. Стенографический отчет. 21-28 сентября 1921 г.; М., 1925, стр. 115)。また、第三回コムソモール大会までに策定されてきた党・コムソモール関係に関する一連の文書が、「党とコムソモールの相互関係に関する規定」という文書に総合されて、それが第四回コムソモール大会議事録の中に収められている(Там же, стр. 341-349)。